
しょ～もなっ!!

Lawlite

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

しよゝもなっ！！

【コード】

N3700N

【作者名】

Lawlite

【あらすじ】

私、狭山ななは今春から高校生！！ときめきいっぱい、希望いっぱい
の高校生活スタート…と思いきや…

第一話 入部？

ホントツツ………に！！
男子ってのはしょもない！
どの女の子の名前は可愛い
とか、どの女の子の
体型は何だとかふつ……
に女子がいるところで
話す。

まだそれはいいとする
私からしてみれば

まだ可愛い……
それ以上のことを異常に
執着してやる奴らを
私は知っている

私の家の……両隣の家
に奴らは住んでいる。
幼稚園、小学、中学、
高校とクラスも全部
同じの幼なじみの
男の子二人だ。

よく三人で一緒に
遊んでいたからわかる……
二人の異常さは普通の
男子高校生から見れば

群を抜いている。

幼稚園、二人で
コソコソしていると
思えば先生のスカートを
めくったり…。

小学、バレンタインの日に
当時モテモテの

男子の下駄箱に山ほどの
ラブレターを仕掛けたり、

（無論、その子が下駄箱を
開けたらドラマみたいに
手紙の山に埋まった…）

中学、先生の座る
座布団が敷いてある椅子の
座布団の下に遠隔操作が
可能のブーブー音なる
クッションを職員会議前に
仕掛けたりと（その先生は
次の日二人に小一時間ほど
説教をかましたらしい）
語り出したら止まらない
数多くの所業がある。

そんな二人が…
高校生に……
ブルブルっ…
しょうもなさな更に
拍車をかけたのだった。

高校の入学式、
運悪くまたもや二人と
同じクラス…

小中高と全部同じクラス

腐れ縁とは…

このことかあっ！

男子が前、女子が後ろで
名前の順で整列して
静かに並んで、どっかの
お偉いさんがどうも
長つたらしい話しを
聞いている…

（どうせみんな聞いてない
だからこんな長く話を
しない方がいいのに…）

その中で密やかに
話し合っている二人は
クククツと笑っている
悪巧み中か…
笑い方もアニメの
小悪党かっ！

入学式が終わり体育館で
私を呼ぶ声…

「おっ！っ！ななあ！
ちよつと来いっ！」

二人だ…。

二人に歩いて近寄った

「何い？早くクラスに行きたいんだけど」

私は口を尖らせて言った

「入学式に俺達は話し合った!!」

「ハイハイ、知ってます知ってますよぉ」

悪巧み、また考えてたんでしょう？」

二人は真面目な顔をしている。

「違う。俺と怜治で部活をつくらうと話し合っていた」

怜治がウンウンと腕を組み頷く。

珍しい…二人が真面目なことを考えていたなんて…

久しく真面目な二人を見てなかったのだからちょっと感動して話を聞いてみた。

「そんなこと話してたのごめんね。悪巧みなんて言ってるで、どんな部活つくるの？」

怜治が進み出て言った
「とにかく人に笑顔を
与えるような

部活を慎治とつくる」

今度は慎治が頷く

ホントに真面目な目を

している、二人がだ。

「でだ…さつき先生に

聞いたところ部活に

なるためには三人、

部員が必要になる…」

怜治と慎治は私に

向き直り、棒みたいに

きをつけをして頭を

下げて二人で合わせて

言った

「たのむっ!!」

俺達の部活に入ってくれ

ホントにお願いだっ!!」

真剣に頼まれて

しまつては断りにくいし

何よりあのふざけた

二人がだ!!

こんなにも頼んでいる…

「別にいいよ。

名前だけでもいい?」

私は遠慮がちに言った

「ホントにいいのか?」

ハモリながら慎治怜治が言う

「二人がそこまでやりたいなら応援してあげるよ。頑張って」

「ありがとう！！なな！！」

まさか：こんなことになるわあ〜〜…

入学式から数日後、

私は慎治怜治に呼ばれた

「これから顧問の先生に会いに行くから…」

慎治がそう言った。

もう顧問もついたのでか…

学校側も早いなあ〜

これで二人もやりたい事

出きるんだなあ〜とか

思っていた。

「ここだ…」

止まったところは

科学研究室だ。

科学の先生か…

理科系の部活かな？

入ってみれば

遠い目したおじさんの

先生がいた。

「谷山先生。

これから宜しくお願い
致します」

慎治怜治がお辞儀した

私も一緒に遅れてお辞儀

「ああ、いい。

横河と渡瀬は戻ってくれ

俺は狭山に話がある…」

んん？私に？なんで？

慎治怜治がこつちをみる

「なな！頼んだぞ！」

そして有無を言わず

出て行つた…何これ？

沈黙…。何が何だか

ワケがわからん。

「あのおく…先生、

お話つて何ですか？」

谷山先生はタバコに

火を付けて煙を吐いた

「横河と渡瀬のことは

中学の先生から聞いた

狭山のことだが。

生徒会長だった

そうだな？」

「はい」

「で、お前ら三人の

部活のことなんだが…

はつきり言つて…

何だ… イタズラが活動の
ようなんだが…

大丈夫なのか？」

「へっ？」

私が気の抜けた返事を
したのを察したらしい…

「これが二人が考えた
部活の内容だ…」

「WJC」

部活の名前らしい…

「しょうもないこと、
くだらないことを

一般生徒から依頼を
受けやる…」

部活の活動内容が…
これかぁ!？」

私はこうしてWJCの
部員になった…。

続・第一話入部？

翌朝、慎治怜治の二人から同時にメールがきた。

朝ご飯を食べている途中携帯が鳴った。

「慎治くんか怜治くんじゃない？」

お母さんが言った。

みてみるとそうだった。

女のCANは鋭い。

牛乳を飲みながら

内容を見てみる…

ブー！！牛乳をはく…

「朝7時30分から

部活開始遅れるな」

同文できた。

ヤバい。遅れる…

只今の時刻7時…

「ご馳走さまっ！！

二人から呼び出しが

かかっちゃった！！」

「あらあら大変ねえ」

頑張って二人の面倒を

みるのよあ〜」

お母さん…そんなに

ニコニコして言わないで

谷山先生は言った

「部活自体は校長から許可はでている…が

他の先生は微妙だ…

校長が面白そうだから

と鶴の一声で出来た

もんだな…

反対する先生は狭山が

いるからしぶしぶOKした

だからあいつらのお守り

頼んだぞお〜」

らしい…。

名前だけではダメに

なってしまった…。

所謂、監視役だ。

家を急いで息をきらして

出ると、慎治怜治がいた

なるほど、

またはめられたあ〜。

「おいっ！！朝ご飯途中で

出てきたんだぞっ！！」

「知ってるよお〜。

牛乳はいたところも

ばっちりみた」

慎治がニヤニヤして

言った。やはり畏かつ。

「で、私を呼び出して

何がしたかったの？」

つんとして言った。

「一応、お礼と

今日の部活について。

なながいたから部活が

出来たと始めっから

わかっていたんよ」

怜治が真面目くさって

言った。

「で、今日の部活は

何やるの？」

「ななは何もしなくて

いい。

ただ俺達がしたこと

記録を取ればいいんよ」

怜治が言う。

「記録って？」

慎治が私の問いに

答えた。

「周囲の反応」

「で、何やるの？」

二人が顔を見合わせ、

ニヤニヤ笑って

「ひ・み・つ」

入学式からおとなしく

していただけに…

嫌な予感。

私達の高校は都内の

有名？私立だ。

だから周りにコンビニが

たくさ〜んある。
駅にも近いからかなあ。
公共施設も周りにある
図書館、博物館とか。

だから学校の周りには
朝でも結構人がいる
サラリーマンとかもだ
学校の校門前にきたとき
慎治が「俺達は今日、
学校の掲示板とかに
ポスター貼りに行くから
先クラス行ってて」

「私も手伝うよ」

「いい。今日の活動の
仕込みもあるから」

悪そうな笑顔だあ〜、

ヤバいなあ〜今日。

「じゃあ、先行くけど
怒られること、

しないでね」

私が昇降口に走り出すと

「は〜い!!」

二人が手を振って

ニヤリと笑った。

普通にクラスに入る
友達の山崎朝華に
あいさつする

「ねえ、なな、今日は

横河君と渡瀬君と

一緒にじゃないの？」

朝華が聞いた

「朝、一緒にきたけど

部活の用事があるから

先行けって」

「良かったあゝ二人が

来ないなんて学校に

くる意味ないし」

はあゝ、めんど。

二人は学年のなかで

イケメンと呼ばれてる。

私の立場なら「ガキ」

絶対にイケメンなんて

呼ばん！！

さて、普通に二人は

教室に入ってきた。

別段、変わったところは

ない（とびきりの

ニヤニヤ笑い以外は）

朝のSHRも普通に受けた。

しかし一限目。

始まった瞬間、先生が

教室に入った瞬間、

二人とも顔を伏せて

しまった。私は別段、

気にしなかった。

昨日、夜遅くまで

悪巧みしてたんだろう…
私の読みはあながち
間違っただけだった。

授業が始まって

10分二人が寝ているのを
先生がやっと気づいた。

全員が注目（おそっ！！）

「横河、渡瀬！起きろ！」

シーン。寝たまま。

「ハア〜」

先生が慎治怜治を

同時に起こす。

名前の順の席だから

前、後だ。

先生が揺さぶる。

「うん〜、うん〜」

「ほら起きんか！！」

先生が顔をみようと

頭をひねると…

「うわっ！なんだこれ！」

先生が驚く声をだす

みんながさらに注目

一瞬の沈黙…

私もよくみると

クラス全員が大爆発した

きちゃっきゃっ笑った

なんと慎治怜治の

まぶたに目が書いて

「先生。俺達
起きてますよぉ」
慎治が悪びれた様子も
なく言った。
クラスはさらにわいた。
これがWJの初活動で
私の初記録だ。
ハア〜。
しょうもなっ!!
皆さん、つまんない
でしょう?
さらにしょうもなく
なるからね…。

第二話 コンビニWARMERS

チャイムの音。

数秒後には生徒達が
ぞろぞろと出てきた。

昼休みの廊下は

普通の業間休みより

人が多い。

ガヤガヤ…

タッタッタツ…

スタスタスタ…

ドカツ!!

「痛っ!!」

「いったい〜!!」

それはベタな運命だった

「ごめん!大丈夫?」

彼女は倒れた俺に

手を差し伸べて言った

吸い込まれそうな瞳に

俺は一目惚れを

してしまった…。

「お〜い!!ななっ!!
行くぞ〜」

「おい！お茶の狭山
ななあゝ、行くぞ」

「うるさいっ！！」

「ごめんね。じゃあ」

彼女はそう俺に言うと
去って行った。

俺の心を温めて…。

はいっ！！部活報告！！

今日も慎治怜治に

メールで呼び出された

全く、しかも時間の

ギリギリにメール。

焦って走って人と

ぶつかっちゃった。

今日は学校外で

部活やるらしい…。

また何かしよゝもない

こと考えたんだらうな…

正門の方に向かって

歩きながら怜治が

「コンビニに弁当を

買っとレジで何て

言われる？」

「それは温めますか？
でしょう？」

私は答えた。

慎治が次に言った。

「じゃあ、そのあとに
僕の心も温めて、
つてお願いしたら？」

「まさか…」

嫌な予感。

「今日は学校の周りの
コンビニの店員さんに
それ言っただけという
反応を示すかやります」
二人が目を輝やせて
言った。

ハア…

今日も子守かあ…

こりゃあ大変。

「でもお金は
どうするの？」

すると慎治が

「部費でるでしょ？」

俺、今日金結構

持つてるから出すよ

「おおっ！太っ腹」

怜治が言う

「おごりじゃねえよ。

今日持つてる金で

全財産なんだからな」

そんな感じで三人で
歩いて行くと

一番最初のコンビニに
着いた。

「この街だけでも
十店ぐらいあるから
全部まわるぞ」

「ハア！？ホントに
まわる気？めんどく」

聞こえないふりをして
慎治が息をひそめて

「まずは俺が行く。
ななは一緒に来て、

店員の反応を見てくれ」

抜き足で慎治は
入った。

私もレジ近くに待機。

一見は品物を物色する

一般の客だ…。

悪いことじゃないのに
ドキドキする。

素早く弁当と

ペットボトルの

ジュースを持ってきた

慎治。レジに置く。

男の店員がレジを

打つ。弁当のバーコード
が鳴った。瞬間、

その時はきた。

「弁当温めますか？」
緊張が私と慎治に
走る…。

「はい。あと僕の…
心も温めて下さい…」

沈黙。

そのまま店員は
弁当をレジへ…

慎治は汗ダラダラ。

(シカトだぁー！ー！ー！
いやいや、普通の反応
だけでも…ねっ!?)
慎治がこちらをむく。
やばっ！泣きそうな目。
店員の対応こわっ!!
マニュアル以外の
接客なしって感じ。
マニュアル化社会
こわっ!!

二人で外に出る。

出た瞬間慎治は
怜治に

「俺、才能ない…」
と落ち込んだ感じで
言うとなんと怜治が
ビシッ

慎治にビンタした。

「馬鹿野郎!!」

一回の失敗で

あきらめるなっ！！

俺達はみんなに笑顔

届けるためにこの部活を

やってるんだろっ！！

みんなの笑顔のためなら

一回ぐらいのへマで

落ち込むなっ！！

お前の意志はそんな

ものだったのかっ！？

「怜治…」

慎治の肩をポンと

たたき、怜治が

「まだ頑張ろう、

慎治…」

「怜治くっくっくっ！！！！」

二人はガシツと

抱き合った。

おい、怜治お前、

沈黙のとき笑いを

殺すのに必死だったよな

次のコンビニに着く。

「次は俺が行く」

怜治が入っていく。

私も少し遅れて入った。

弁当を選びレジへ。

「お弁当、温めますか？」

「はい」

怜治が普通に答える。
女性店員がレンジへ。
タイマーを回すと
温め始めた。

店員と怜治の目が合う。

一瞬の沈黙。

「あっ、あと俺の…」

バゴォン！！

レンジから黒煙。

怜治が跳ね上がる。

「ああ、まただ。

レンジの調子悪いな」

女性店員は怜治を

見て

「何かおっしやいました？」

「いつ、いいえ…」

マルコゲの弁当と

一緒にコンビニをあとに

数十店まわるが

みんな反応が悪い
だいたい無言。

「ここが最後…」

慎治が言つと

「ここが最後…」

怜治も言い、私を

見る…えっ？まさか…

「アネゴっ！！」

「誰がアネゴだった！！」

「ラストお願いしやす

俺達、いままでの

失敗で人間不信まで

あと一歩です。

助けて下さい。」

二人がきをつけ礼して
言った。

「ムリムリムリ！

恥ずかしいったら

ありやしない。ムリ！」

「じゃあ俺達は

どうして出来たんです？

俺達も恥ずかしかった

でもみんなの笑顔の

ためになればと…

歯を食いしばって」

二人は私に土下座し、

頼んだ。

「アネゴっ！！」

頼んます！俺達の夢の

ためにも思い、どうにか」

コンクリートに

頭をこする勢いだ。

道行く人もこちらを

見て訝しげな顔する。

恥ずかしい…

「わかったわかった。
わかったわよ。

行けばいいんですよ。
行けば」

「おおっ！ ななねえ」
ワザとらしい感嘆の
声を挙げる二人。

「行くよ」
店に入る。深めに
帽子を被った店員が
レジに…

弁当をとり、レジ…
行くまでに恥ずかしくて
顔が真っ赤になった。
少し行くのをためらう。
うつむきながら
レジのまえに。
ドキドキする。
品物をレジに。
バーコードを読み取る
音。そして、
「お弁当、温めますか？」

「はい…」
思いきって顔をあげ

「わっ、私の心も
温めて下さい!!!」

店員と目が合う

んん？この顔はあ!!

今日、廊下で

ぶつかっちゃった人!!

「あ、あのっ、あの…」

店員は顔を赤くして

「俺で良かったら…」

聞かずに猛ダツシュ

「速っ!!」

慎治怜治がいつぺんに言った。

「待ってくれ!!」

ななっ!!」

私の今まで一番

足が速かったときだった

翌日の放課後。

先生に活動報告に

行った。

「うん。

こりゃあまた

くだらないことしたな」

慎治怜治が

「ありがとうございます」

即座に先生が

「誉めてない」

報告書をじっくりと

見たあと先生が聞いた

「この買った弁当だが…

金はどうした？」

「慎治が出したんで

部費から下さい」

怜治が言うと先生は

「うん？」

「部費です。部費。

出るんでしょ？」

「ん…出ないよ」

「えっ!？」

「新設の部活だから

予算でないんだよ。

先に言っとくべき

だったかな？」

ガーン、と今にも

言いそうな顔を慎治が

している。

「俺の全財産…

誰か…誰か……………」

「俺の財布を

温めてくれ……」

第三話 the wrong news

WJCの部室。

三人組が今日も

揃っている。

隣の部屋から何か

騒がしい音が聞こえてくる。

「なにか騒がしくね？」

「隣に新しい部活が

入るらしいよ」

なな。(イライラ…)

「へえ〜、そうなん？

ところで最近どう？」

「別に：あやとりが

上手くなっただぐらい」

「へえ〜、そうなん？

お前、今日あやとり

持ってない？」

「持ってないい〜」

なな。(イライラ)

「何か腹へらね？」

「へらね。折り紙は？」

「別に…」

ガタン！！

おもむろにななが

立ち上がり、

「あんだたちい!!」
「はい!!!!」
二人がピシッと
グダグダからなおった。
来客の応対用の
ソファールとテーブルが
ガタンと音をたてた。
「わかつてる!!」
あんだたちの
しゃべり方似てるの!!
特徴ないのっ!!」
「で!?!」
二人が不思議そうに
聞いた。
なながダークな顔で
ニコツと笑った。
「察して…」
「わからん」
堪忍袋の緒が切れた
音がした。
「どっちが話してるか
わからんのじゃ!!」
「何で？」
「これ読んてる人が
分からないし、
なにより……」
机を叩きつけ、
「〜が言ったとか
書くのがめんどいん
じゃ〜〜!!」

「「なんて理不尽な」」

「いいから語尾に
特徴付けてキャラ
立たせんか〜い!」
「「ひえ〜〜!」」

廊下をヒタヒタ歩く
上履きが一足。

WJCの部室のドアの
前で止まった。

ガラガラ、

「あの〜…」

視界に入ったのは

男子二人に女子一人。

明らかに女子は

不機嫌だし、こっちに

気づいてない。

男子二人は何か

不思議そうな顔：

「はいっ、慎治は

だぴょん を付ける!」

「はいっ、だぴょん」

えええ〜。

「怜治はブンブン」

「はいっ、だブンブン

お、お客様だブンブン」

「え？」
残りの二人がこっちを
向く…明らかに
怪しい感じ…だぴょん、
ブンブンとか、何？
ヤバイ…
本能が告げた

「何で逃げるぴょん！？」

「え〜と？ここは〜？
新しく出来た部活…
ですよ〜？」

捕まえて引き戻し、
ソファ―に座らした。

「そうだ、ブンブン」

「ええ〜」
凄いいやそうな顔…
ななが

「あのどちら様ですか？」

「ああ、そうでした！？

私、新聞部の

滝川あやこ文子です。

今日はこちらの部活の
取材をしに来たんですが…？」

「取材？」

三人が珍しく八モった。

「そうです。我が新聞部は
全校生徒の活躍や

ニュース、伝言などを

伝える活動をしています

だから、新たに出来た

部活をみんなに

分かりやすく伝える

ように取材をしに

来ました。

こちらの部活動は

特殊なのでかなり

良い記事が書けると

思います。

取材してもよろしい

でしょうか？」

まあ、私からすれば、

願ってもないことだ。

正直この部活のことを

二人の口からちゃんと

聞いていないから

ちゃんと聞いておこう。

「まあ、いいぴよん

最近、どうしたら

この部活が有名になるか

悩んでいたところだ

ぴよん」

慎治怜治二人とも

頷き、納得した顔を

している。

「よろしいんですね？」

「いいだブンブン」

私も頷いた。

滝川さんは明るい顔になった。

「じゃあ、早速自己紹介
お願いします」

三人が顔を見合わせて

「じゃあ、俺からだ

ぴよん 名前は

渡瀬慎治だぴよん

部長だぴよん」

滝川さんがメモ帳に
スラスラ書く。

「俺は横河怜治だ

ブンブン 同じく部長

ブンブン」

メモ帳から顔をあげ、

滝川さんが

「二人が部長ですか？

珍しいですね？」

「まあねだぴよん

だブンブン」

「部活の活動は

どうやって決定

していますか？」

「「だいたい二人とも

同じこと考えてる」」

それぞれの語尾を
つけて二人が言った。「ふうむ。ホントに息
ピッタリですね。

じゃあ、次……」

私の顔を見てきた。

「はつきり言うつと

一番興味あります……」

うつ……

ジロジロ見られると

やりにくいな……

「私は狭……」

私の声は途中で
切れた。

「こいつは狭山なな。

スリーサイズは上か……」

「ちよつ!! 待って!!?」

何で知ってんの?」

「知らないぴよん

てきとくに言おうと

しただけぴよん」

問答無用でこぶを

頭のとっぺんに

作ってやった。

「ごめんね。私は

狭山なな。こいつらの

子守役。役職は

副部長兼書記兼会計兼

記録係りです。」

「なるほど」

メモ帳に何か

付け加えている。

「じゃあ、この部活の主旨は何ですか？」

「下らないことを

やるだブンブン

そしてみんなを

笑わすだブンブン 「へっ!？」

滝川さんが

驚きの声を出す。

私がかさず

「みんなの笑顔の

ために活動をしています。

結構様々な活動を

選ばずやっているの

しよゝもない仕事

たまにあるってこと

半分嘘だ。

「ふむ。では主な活動内容は何ですか？」

慎治がかさず

「あやとりだぴよん」

「えっえっ!？」

フオローする私

「こいつらホントに

しよゝもないから

真面目に聞いちゃだめ。

えゝと自分達で出来る

みんなの笑顔に繋がる

活動を考えて

やっています」

「ああ、そうですか…

ある種の慈善活動

ですね？凄いですね」

「これからは

意見箱を設置して

依頼を聞いて活動

するだぴよん」

「へえ〜考えてますね」

私も初耳だったので

ビックリしたが顔には

出さなかった。

でも待てよ…

依頼ってもしかして…

「依頼はしよ〜もない

ものしか来ないと

思うブンブン

だけど頑張るブンブン」

やっぱりか。

どちらかというとそっちが

メインだろっ！！

「では依頼がない日は？」

「コンテスト優勝を

目指して頑張ってる

だぴよん」

これも初耳。

私の疑問を滝川さんが

聞いてくれた。

「何ののでしょうか？」

「ダジャレだぴょん」

「ダジャレかいつ!!?」

思わず立ち上がった
ツッコんでしまった。

「えっ!? 違うんですか?」

滝川さんも真面目に
私に聞いてきたので
二人のことだから
ホントかも知れないかも
と思ったので

「えっ、え」と…

そうそうやってます。

次の大会は優勝します」

「そうですね。じゃ、
優勝したらまた特集
組みますんで頑張って
下さい」

「では…」

滝川さんの声が
途切れた。

WJCの部室のドアが
開いたからだ。

「お前ら三人、
ちよつと来い…
依頼が来たぞ」

暗い真剣な顔をした
顧問の谷山先生が
来た。口を真一文字に
結んでいる。

「「分かりました」」
二人がすくつと
ソファーから
立ち上がって部室から
出ようとした、
「ちょっと待って下さい。
取材はあとちょっと
残ってます」
滝川さんも立ち上がって
止めようとした。
が、二人は先生に
付いて行ってしまった。
「ごめんね。さっきも
言っただけどこの部活は
みんなの笑顔をつくる
ためにつくった部活
なんだ…。ちょっと
変わった部活だから
みんなから認められるか
不安だけど、笑顔が
最優先事項だって
二人いつも言ってるから
許してあげてね」
肩を落としてる
滝川さんに言った。
「そうですね。
仕方ありません。
私もみなさんの
部活が認められるよう
頑張って記事書きます。」

狭山さんも行つて

あけて下さい。

子守、しなくちゃ」

私はちよつと

苦笑いしたがまあ

感じは悪くないかな。

「では、一週間後に

新聞は発行されます。

楽しみにしていて

下さい。ではまた」

滝川さんはちよつと

真面目で天然だけど

良い人だった。

谷山先生の部屋に

着くやいなや、かなり

重い雰囲気だった。

「よし、狭山も来た。

お前ら、最近暇だろ？

校長直々の命令だ……」

まさか活動しないから

廃部とか？まずい……

緊張の一瞬。

沈黙。

「お前ら……」

「ダジャレコンテスト
出場しないか？」

「マジかよ!!!」

一週間後。

WJCの部室に滝川さんが
来た。

「出来ましたよ!!!
新聞!!!これでこの
部活も全校生徒に
知られるでしょう？」

興奮気味にテーブルに
ひらりとおかれた新聞を
ワクワクしながら

三人で手にとった。

30秒新聞を見回す。

(あれ…?)

三人が顔を見合わず。
もう一度30秒見る。

「どうかしました？」

私達の反応を訝しげな
顔で見る滝川さん。

「滝川さん…これ…」

そついうと部室の

ドアが勢いよく開いた。

「ここにいたか滝川!
ちよっと来いっ!!!」

「部長？どうかしました？」

「どうかしましたかも、

お前また間違った部活

特集しているぞっ！！」

「へっ？この部活じゃ？」

私達を見る。

「違う。新しく部活でも

WJC部ではなくて

隣の部室の（文部）だ」

「えっ！？ここ、文部じゃ」

「いいから部室まで

行くぞ！！書き直しだ！！」

ズルズルと滝川さんは

引きずられていきながら

「だってこの人、

語尾にブンブって……」

来るときと同じく

勢いよく閉まった。

部室が暗い雰囲気にな

り静まり返る。

「シューーーーン」

「ブンブン（汗）」

怜治の声が木霊した…。

第四話 Who said DAJARE?

WJCの部室前。

廊下で三人の生徒が

何か騒いでる。

二人が男子、一人が

女子である。

男子の一人が持っている

箱がさぞかし気に

くわないのか女子が

指を差し何か言っている

「だからあゝ、

（お悩み相談BOX）って

書いたらおもゝい悩みも

相談されにきちやう

かもしれないんだよゝ

だからテキストに

（意見箱）とかにして」

狭山ななが言うと

すかさずに横河慎治

渡瀬怜治の二人が

声を揃えて言う

「別に良くね？

この部活のモットーは

（みんなを笑顔にする）

だから悩み相談もOK」

「そうだけど…」

あんだ達出来るの？
人の悩みを解決する
なんて？」

不安だな。全くいつも
テキト。なんだから。

「出来る、出来ないは
問題じゃない…」

こつちが誠心誠意を
尽くせば良いんだよ」

怜治が言った。

真面目な顔で

言われたのでななは
結局、折れた。

「仕方ないかあ。

部長の二人に言われた
ならそうします。」

でも…」

「いつから語尾直して
良いなんて言ったあ。」

「ええっ！！！！」

まだ続いていたの！？」

「当たり前でしょ！！」

記録係りのこつちの
身にもなつてよ！！

読者がまだどつちが

話してるかわからない
でしょうがっ！！」

慎治怜治はくるりと
周り部室へ緊急避難した
「あっ！待て〜」

30分後、三人は暇なので
大富豪をしていたが：

コトン…

金属に何か落ちた音が
した。

「何の音？」

ななが手を止めて言う。
カードを配る途中だった

「多分、早速依頼だろ
意見箱の音だ。

取ってこよう」

慎治が立ち上がり
廊下を出た。

部室に再び入ってきた時
白い封筒を持ってきた。

慎治がすくと腰を
おろすと

「開けてみようぜ」

怜治が言うと

ビリビリと破り始めた。
中から手紙が出てきた。

慎治が読み始めた。

「え〜と、WJＣの皆さん
お願いがあります。」

漫才研究部主催の…」

慎治が止まった。

そして笑いをこらるため
顔を歪め、口に手をあて
テーブルを叩き始めた。

「どうした？」

怜治が手紙を見る。

怜治も笑い始めた。

「どうしたの？ゲツ…」
手紙を見ると

ダジャレコンテストの

出場依頼だった。

「これは…この間

(第三話を読んでね)

断ったやつじゃない…

誰が入れたの？」

そーいうと部屋のドアが
ガタンといった。

三人が見ると顧問の

谷山先生がいた。

「俺からの依頼だ」

「先生っ！どうして？」

私は不機嫌な感じで
言った。

「う〜ん…俺が沢山の
部活を顧問してるの

知ってるだろ？」

そう先生は大量の文化部の顧問をしてる。

「知ってます。けど…」

それが何か…？」

先生はため息混じりで

答えた。

「先生みんなの悪口じゃないけどこの学校、

部活を創立しやすいだろ？」

確かにWJCも簡単に創立出来たけど…」

「文化部の何か訳の分からん部活は全て俺が顧問んしてん…」

半ば押し付け、半ば

進んでだが…」

「『そうなんですか？

大変ですね？』」

慎治怜治が他人事のように言った。

「その一つ、漫才研究部がこのダジャレコンテストをやるわけだが…」

参加者を募集している」

「ハイハイ。で？」

「校長がお前らも

参加してみると…」

校長直々の命令か…
こりゃあまずい…
創立を推したのも
校長だからここで
活躍しなければ…。
と思いつつ、

「あんまり出たくないなあ」

と言うと先生は

「そんなこと言っ
ていいの？そしたら
こっちもね
顧問やめちゃうよ
誰もこんな部活顧問
してくれないよ」

「やらせて下さい！！」「
」
慎治怜治が身を乗り出し
答えた。

先生の顔がニヤニヤで
広がった。うわっ！
悪い顔…。
脅しに屈するWJCだった。

「で、どうするの？」
私が聞くと慎治が
「決まってる、
出るからには優勝を
目指す！！」

「そうだっ！！ダジャレは俺達の十八番じゃないか」

怜治が気合い入りまくり

「俺達…の中に私は入ってないよね？」

「…無論、入ってるわ！！」

これから毎日至高の

ダジャレを考え抜く！！」「」

それからコンテストまで

一週間は部室でダジャレ

考えた。しょくもなっ！！

谷山先生に言っつて

私は二人の付き添いで

行くことにした。

慎治怜治は

「…なな！！気合いが

足りん！足りんぞっ！！」「」

と言っつていたが

すんなり受け入れた。

大会当日。

体育館で行われるため

三人で体育館に入った。

すると

「巨大なダジャリストの

匂いがするぜっ！！」

(ダジャリストってなんだよ)

心の中で突っ込んだ。

「好敵手^{ライバル}たちが

俺達を呼んでる!!」

何故か二人とも

眉毛が濃くなり

少年バトル漫画の

主人公の顔をしてる。

「今日、ここで俺は

最強のダジャリストになる!

慎治!! お前だろうが

手加減しないぜっ!!」

「ああ!! わかつてる。

決勝で会おうっ!!」

二人が熱い握手をした。

「参加者は集まって下さい

今から開始します」

漫才研究部の部員が

マイクを使って言った

「いくぞっ!!」

「おおっ!!」

二人とも予選で

落ちれば良いのに…

数分後:

体育館は50人ぐらい

「さあ、始まりました!!」

漫才研究部主催校内

最強ダジャリスト決定戦!!」

「ダジャリストって

結構使われてるっ!!」

思わず口走ってしまった

周りの人達がざわついた

「えっ!?!まさかダジャリストも

知らない人がここに?」

「無知にもほどがある…」

「いや〜ね。新米かしら?」

汗ダラダラかいてきた。

「参加者250人を

越えるなか…

先日、行われた

厳選なる予選を

勝ち抜いたダジャリストが!!

今日、チャンピオンを

決めようとしてます!!」

(予選…いつやったんだ?)

思っていると谷山先生が

近づいてきた。

「予選なんてないよ

参加人数盛っちゃった」

さらっと言った。おい!!

「決勝に出る人数が

ホントの参加人数」

「さあ〜、出てきて

貰いましょう!!」

ダジャリスト!!カモンツ!!」

手を振りながら

続々と1人、2人、3人…

続々と1人、2人、3人…

続々と1人、2人、3人…

「5人っ！！！！！」

盛りすぎでしょうっ！！！！」

「てへっ
」

「てへ じゃない！！」

ステージを見ると

慎治怜治がかなり

興奮した顔をしている。

うわゝ、これ知ったら…

黙っところ。

「さあ、今回決勝に

進んだ猛者ダジャリストを

紹介しましょう！！

まず、一人目

クラスで勢いで参加

しちゃった。山田君！！」

この時点で猛者じゃない！！

山田君もかなり恥ずかしそう。

「二人目、ダジャレの

魔術師として名高い

下田君！！」

変な仮面とマントという

コスチュームの男子が

マントを翻し、司会の

マイクを奪った。

「今年こそは優勝する。

でなければ、俺は

「留年するっ！！」

堂々と優勝宣言すると
体育館内が湧き上がった。

司会がマイクを

受け取り

「下田君はここ数年、
チャンピオンを逃し

五年留年中です」

こんな大会に人生

無駄にすんなよっ！！

「続いて三人目、四人目を

紹介！！その能力は未知数！！大型新人ルーキー！！WJ Cの横河
慎治君、渡瀬怜治君ですっ！！」

二人が前に出て歓声に

応えた

「最後に去年は惜しくも

最下位！！自らを

G O D O F ダジャリストと

呼ぶ、横須賀君！！」

最下位なのに神を

名乗っとする！！アホかつ！

「さあ、この5人により

繰り広げられるバトルを

審査するのはこちらの

三人っ！！

前回チャンピオン！！

二階堂君！！」

体育館はかなり

湧き上がった。

「きゃ〜二階堂様！！」

黄色い声援だ。

「ダジャリストのプリンスよ」

「サインをちよ〜だい」

二階堂君が手で合図する

すると体育館が静まる

「今日という日を

楽しみにしていた…

俺と張り合える奴を

やっと見つけられる…

さあ、こいつ！！お前たち

全力で審査してやる！！」

会場が最高のボルテージに

なった。

「皆さん、お静かに…

二人目は主催者の

漫才研究部部长、

杉山君。

三人目は一般生徒から

抽選で選ばれた

谷田さん」

メガネをかけている

谷田さんは興味なさげに

本を読んでいる。

「さあ、早速審査に

移りましょう!!
ルール説明です!!
単純ですっ!!
一人ずつダジャレを
言い、審査員が
一人10点満点で評価!!
最高点が30点です!!

発表する順番は
さつき抽選しました
順番です。

一番 山田君
二番 下田君
三番 渡瀬君
四番 横河君
五番 横須賀君です!!
では、いきましよう!!
レッツ!!
会場が一斉に
「「「ダジャバドっ!!」」」
と叫んだ。
なんだかな…(汗)

「山田君、お願いします」
山田君が緊張した感じで
ステージ中央に出た。
深呼吸して一瞬の間を
おく
「自転車をリサイクル」

会場がシーンとした。

二階堂君は首を横に振りヤレヤレと
いった感じにため息。
杉山部長は表情を崩さない。

谷田さんは黙々と
点数をボードに書く。
おお…何とも普通な
ダジャレ…。

「さあ、一体何点
なんでしようか!?
一斉にどうぞっ!!」
三人がボードを見せる

二階堂君 4点

杉山部長 5点

谷田さん 3点

「合計で12点、
感想を聞いてみましょう」

二階堂君がマイクを
「オリジナリティが
足りない。ダジャバドは
敵をも唸らすパンチが
重要だ。聞いたこと
ないダジャレである
のが第一条件だ。
ということでのこの

作品はスタートライン
にも立ててないわけだ」

「なるほど、杉山部長は？」

谷田さんと

メガネが被るのを

気にしている坊主で

真面目そうな杉山君は

メガネをくいくいして

「私も同意見。」

やはりオリジナリテイ」

「では谷田さん……」

「面白くない」

即答。

山田君も少ししよんぼり

「それだけでなく

リズムがない。語呂も

悪い……」

まだまだダメ押しが

続きそうなので司会が

「さあ、次に下田君」

マントを翻し中央へ

審査員をチラリと見、

「兵士がヒゲを

ソルジャー……」

またもや静まる……

二階堂君は今度は

真剣な顔でボードに

向かう。

「さあ〜どうぞっ!〜!」

二階堂君 6点

杉山部長 5点

谷田さん 3点

二階堂君が

「なかなかいい線だが

ひとつ何か足りん。

もうちょっとて感じ」

「私も同意見です」

「つまんない」

「合計14点。暫定一位!〜!」

下田君は守りきれぬのか!〜?次、渡瀬君!〜!」

怜治が前にでる

「孫が大好きなたまご」

「さあ〜どうぞ!〜!」

二階堂君 7点

杉山部長 7点

谷田さん 3点

「合計で17点。

この時点で下田君の

留年が決まりました。

感想を聞いてみましょう」

「うむ、久々に巨大な
オーラを持ったダジャリストを見た」

オーラなんてあるんかい

「まだまだ未熟だが

大きく成長するだろう

しかし、チャンピオン

にはまだ遠いし、

オリジナリティが

またない……」

「私も同意見」

「リズムは良かったが

つままない」

「さあ、次は横河君、

渡瀬君を超えられるのか!？」

慎治が自信ありげに

前にでる

「気の毒な木の毒」

二階堂君が頷く

杉山部長は変わらず

「さあ、どつぞ」

二階堂君 8点
杉山部長 8点
谷田さん 1点

「いい！久々に
シンプルかつ個性的な
ダジャレを聞いた。
さっきの渡瀬君同様
偉大なダジャリストになる。
だが、単純さのなかに
もう一工夫欲しかった」
「私も同意見です」
さつきからまともな
意見言つとらん部長。

谷田さんからは
「つまんなすぎ」
と一言。

「さあ〜ラスト、
大混戦です。初の
二人のチャンピオンが
誕生するか！？横須賀君が
一人勝ちかつ！？
運命の一瞬です！！！」

神を名乗る横須賀君が
前に出た…そして
「やかんと焼き肉」
「ダジャレじゃ〜」

ないじゃんんんっ！！！！」
静まる会場に私の声が
こだました。

「参加者以外の方、
お静かにお願いします」
我にかえり

「すみません」と謝った。
謝ったとき、二階堂君と
視線が合った。

二階堂君はかなり
驚いた顔をしたような
感じがした。

「運命の採点です！」

二階堂君 3点

杉山部長 2点

谷田さん 0点

「なっ、なんだと…」

このダジャレの神が

この点数だと…

嘘だ、嘘だ、嘘だあゝ」

叫びながら体育館を

疾走し出て行く横須賀君

に見向きもせず、司会が

「今回のチャンピオンは

WJCのお二人です」

そう言った瞬間…

「ちよっと待ってくれ…」

二階堂君がおもむろに
立ち上がり、

「俺はいま感動している
俺と同等のオーラ…
つまりダジャオーラを
持つ奴を見つけた…
その…」

と指差したのは

えっ…私？

「君だ。さっき感じた。
君はいま最高の作品を
隠し持っている…
僕に見せてくれ」

「えっ…!!そんなの…」

周りにいた人が私を
有無を言わさず

ステージの方へ…

ざわつく会場…

司会も煽り、

「二階堂君が指名した
飛び入り参加の人!!
名前はなんですか!?!」
仕方なく

「狭山なな」と答えた。

「では、狭山さん、
どうぞ!!」

緊張…何にもないのに
また巻き込まれたあゝ
どうしよう…

無心の状態で
思い浮かんだのは

「サンダルに1\$札を
ハサンドル」

会場がざわつく。

二階堂君と杉山部長が
びっくりした顔をする
谷田さんは頷く。

「さあゝ運命はいかに!」

二階堂君 10点

杉山部長 9点

谷田さん 6点

「なんと優勝は…

飛び入り参加の

狭山ななさんっ!!」

「ええええ絵江え得」

「素晴らしい…実に

素晴らしい」

「私も同意見です」

「何か言いなよっ!!」

突っ込んだ。

「懸詞が良かった」

谷田さんから今日

一番の誉め言葉を

もらった。

数日後。

新聞部の滝川文子が久々に
部室に来た。

「約束通り!!狭山さんを
特集しときました!!」

昨日の学校新聞、

読みました!？」

私は苦笑いして、

「読んだよ…」

読んだけど…」

続きはドアが

開く音にかき消された

「滝川っ!!また

間違ってるぞっ!!」

部活名がWOWわおに

なってるぞっ!!」

「えっ!!またですか!？」

新聞部部长が文子の

首をつかみ引きずって

「また間違えて…
たつぷり説教だっ!!」
「うっうっうっ」

ガラガラ

ドアが閉まった、
と思ったらまた開いた
慎治が意見箱を持って
入ってきた

「おゝい、依頼だぞっ!!
しかも、なな宛だ」
ニヤニヤと慎治。

「えっ?なんの依頼?」

「ダジャレの添削と

ダジャリストの弟子入りだ」

「はぁあゝゝゝ!!!!」
校内最強のダジャリストが
いる部活として初めて
校内にWJCが有名に
なっただけ…

私はその一週間
ダジャレの添削に
おわれつづけた…。

しよゝもなあゝ…

第五話 おやじのオアシス

さあ、活動報告

放課後のWJＣの部室。

「今日の活動は？」

私、狭山ななが

幼なじみの男子二人、

横河慎治、渡瀬怜治に

聞くとまず慎治が

「今日は綺麗な

折り紙の折り方とか？」

すると怜治が

「いや、今日はムズイ

創作あやとりだろ？」

「二人とも

地味すぎでしょっ！！

どうするのすっごい

おもい相談来たら……」

私自身、そんな相談

来ないと思いいながら

言ったがもしもが

この世界の常識だ。

「慎治、そんなもの

来ねえよとななに言え」

「そんなもの来ねえよ」

「なんで経由した！？

直でいいじゃん!？」

ソファーに寝転んでる
慎治が

「ともかく、そんなの
来ないぜ。待ってるだけ

無駄無駄あゝ」

「無駄無駄あゝ」

「黙れ 怜治」。

そんなのわかんないよ。

(人生の道に迷った)

なんて相談きたら……」

「(馬鹿野郎!! 人生は
迷って迷って始めて

オアシスなんだよ!!)」

って言って解決だ

とりあえず、来ないよ」

ガラガラ。

部屋のドアが開く。

「人生の道に迷いました」

「「「来ちゃった!」「」」

WJの部屋に暗く

青ざめたおもむき顔が

一人余計にいる。

ソファーに三人、
テーブル越しに来客が
来客用のものに一人
座っている。

「名前は？」

怜治が恐る恐る聞く。

「二年三組田中勝馬」

生気のない声、

溜め息混じりに言った。

「で…何の相談です？」

私が聞いたが、

「…」

苦しそうに頭を横に

振るだけだった。

「言いにくいですか？」

「…」

黙っていたがたてに

頭がふれた。

本当に言えないこと

みたいだ…。

顔は先ほどもいった

感じに青ざめ、ほほが

こけているように見える

(ホントに苦しそうだ)

慎治怜治も思ったのか

顔を見合わせてから

眉をひそめた。

そして頷きあい

「僕達は普段は

しょくもないことを

やっていますけど、

真剣に悩んでる人には

真剣に向き合います。

すぐには信用出来ない

と思いますが、悩みを

話してみてください。

絶対に助けになりますから……」

二人がそう言うと

勝馬は顔を上げて

苦しそうだが微笑んで

「ありがとう」

と言った。

「で、相談とは……？」

怜治が聞いた。

勝馬は三人をそれぞれ

見て、

「誰にも言わないと

約束してくださいますか？」

三人がゆっくり頷くと

「僕は悩んでます。

それこそホントに人生を

左右しかねないもの……

だと思っています」

勝馬がゆっくりと

話し出した。

「僕には好きな人がいます。多分、向こうは気付いてるでしょう。何回か一緒に遊んだりしました。しかし、あんまりうまくいかなく進展がありません…。何度も何度も告白を試みましたが…。僕はどうすればいいでしょうか？」

沈黙…。

うう、私はこういう話苦手だし、アドバイスは無理かも、とか思ってた黙っていたら慎治が

「相手の方の名前と学年クラスは？」
真剣な顔で聞く。
おお、慎治すごい、と感心した。

「彼女の名前は
西園寺華蘭^{からん}
2 - Aです」

私はちよつと疑問に

思った。

（うちの学校は組は
数字表記なのに…
他校ってことか。
名前もすごいな）

怜治が次に

「西園寺さんの特徴は
どんな感じですか？」

「ポニーテールで

シュシュをつけてます。
痩せ型でメガネで

いつもニーハイです」

（やっぱり他校かな？

ニーハイはうちは
見たことないから）

慎治が

「西園寺さんは普段は
どこにいますか？」

「いつもは学校に…」

「ただど呼べばいつでも
来ます」

（すごいな、普通の

女の子にそこまで

させるなんて…彼女も

彼のこと好きなんじゃ）

とか思っていたら慎治が

「いま、呼べますか？」
勝馬は少し考えた顔をしたが

「分かりました」
と答えた。なにやら
ごそごとと鞆から
取り出した。

最新型の電話も
メールもゲームも
出来る携帯電話だ。

「メールで
呼ぶんですか？」
怜治が聞くと何やら
携帯から音がする。

「来ました」
「返信早いな…」
つてええ！これは？

怜治が変な声を出す。
慎治も私も見ると

「『ゲームかよっ！！』」

「悩んでる彼女つて…」

このゲームの…？」

「はい。ヒロインの
西園寺華蘭です」

「二次元かつ
ゲームかよっ！！」

そんなんで人生を
悩むなあ〜！！！！」

悪びれもせず勝馬は

「失礼なっ！！華蘭は
僕のエンジェルだっ！」

ソファーから立ち上がり

テーブルから身を

乗り出してツツコんだ

私に言った。

その勢いに押された

私は慎治怜治をみる。

二人がこそそそと

話し合った結果、

「勝馬くん、

君と西園寺さんを

くつつける、つまり

ゲームをクリアすれば

いいのかな？」

勝馬は頷き、

「頼む」

「えっ！？ホントに
やるの？」

私と言うと二人が

「「やってみようぜ！

依頼人の依頼は

断ってはいけないだろ」」

「僕からもお願いだ。

やっぱり女性の気持ちは

女性にしか分からない

だろうからな」

ハア〜部長命令じゃ
仕方ないか…やるか。
溜め息混じりの私を
加えて4人で
恋愛シミュレーションを
やり始めた。

で、早速開始。

「慎治 怜治は

こういうゲームを

やったことあんの？」

「「普通のゲームは

結構やってるけど…」」

「勝馬先輩、この

ゲームの名前は？」

「おわしす」

慎治が反応した。

「怜治、聞いたか？」

怜治が頷く。

「ああ…」

二人が何故か

喉をゴクリといわせた。

「どうしたの？」

二人が見つめ合い、

意を決して言った。

「二階堂君も

はまってる……」

「マジかっ？」

「二階堂曰わく、

（偉大なダジャリスト達も

苦戦したという

超マニアックオタク

ハイパーゲーム）らしい」

「ダジャリストってだから

何！？てか、二階堂君、

イケメンなのにオタク！？

てか二人とも仲良いの！？」

「ああ、メアドも

知ってるぜっ！！」

「誇らしげに言っても

カッコ良くないよ！！

てか……」

「もう始めていい？」

我にかえり

「すみません」と

謝る。

オープニングを

見る。セーブデータの

読み込みをして、

やっと始まった。

慎治が

「どういうゲームですか？」

「自分が主人公になり
華蘭と関わっていく。

三択の会話から

選び進めていく。

どんなエンディングに
なるかはその三択
しだいになる」

ほお〜理解した。

つまりどの会話が

良いか選んで欲しい
ってことだ。

「3ヶ所分からない

ところがあるから

考えてほしい？」

「分かりました」

どんどん勝馬が

進めていく。ゲームを

開始してから五分後：

「ここが一つ目だ」

華蘭は美少女アニメの
代表、これぞヒロイン
って感じた。

『どっか食べに
連れて行ってよ』

華蘭の声が携帯から
出てきた。なんとも
愛くるしい声だ。

「ん？何か三択だ。

この3つから選べば
いいんですね？」

慎治が勝馬に聞くと
頷く。

「じゃあ選ぼう……」

三人で多数決で選ぶ」

「了解」

私と怜治が頷く。

「じゃあまず外食の
選択肢は……」

「ハンバーガー」

「が銀座の の

レストランで

？が……」

アフリカ部族のミニミズと

m i x 幼虫スパゲティ…」

しゅん。場が静まる。

「慎治、そういう

エグいボケはいらない」

私が言うと

「いやいやマジで

書いてあるからね…」

「嘘だ！ゲーム知らない

私でさえも嘘だと

分かるよ…」

「ホント、ホントだよ

ほらっ…」

慌てて携帯画面を

私に見せる。

「マジだあ〜〜…!!」

なんで！？絶対制作者の

ネタでしょっ…!!」

「いやいや知らないよ。

俺が制作者じゃないし

とりあえず選ぼう…」

せ〜ので番号言えよ。

せ〜の

「？」

「「？」

私が？。慎治怜治が？。

「あんたたち、

ふざけてるでしょ…!!

どこのどの女子が

ミミズとmix幼虫を
好き好んで喰うかつ!!」

すると怜治が真面目な
顔で反論した。

「なな!! 華蘭が
無類のゲテモノ料理
好きという可能性を
安直に捨ててないか？」

「そうだぜ! なな!

華蘭はフードファイターで

(どんなものも

たいらげる) が代名詞で

休日はいつも世界中の

ゲテモノ料理を

食べまわってるんだぜ!!」

「なんで美少女ゲームの
ヒロインがそんな設定?
オタクでも引くわっ!!」

「いやいや、また

そのギャップ萌えが

たまらんでは？」

「なんでそんなに
ギャップ萌えを推す?

オタクでもないのに
オタクを知ったふり
しないでよ!？」

「とりあえず、

多数決だから? を

選ばうぜっ!!」

「いいけど、絶対に

b a t e n dだからね」

慎治が携帯のキーを

操作し、?に合わせる。

「いくぜ…」

ポチ…

『嬉しい!!大好物!!』

「うそでしょっ!？」

華蘭、フードファイター説

当たり!？」

「だから言つたる」

なんか納得出来ない…

モヤモヤするうゝ

「おっ!次の選択肢だ。

レストランでの会話だ」

『この後、どこ行く?』

「じゃあ、選択肢は

?タワーで夜景を見る

?花火大会に行く

で?が…

居酒屋で二次会」

「華蘭はおっさんなの!？」

誰がレストランで

ミミズ食べたあとに

居酒屋で酒のむの!？」

てか、華蘭高校生だろ!？」

未成年は飲んだら

ダメでしょっ!？」

「いや…」

ここで勝馬君が
しゃべった。

「華蘭の設定は

コスプレ好きの

28歳のOLでバツイチだ」

「マジかよっ!？」

これには慎治怜治も

びっくりと思いきや…

「「28歳でこの若さ?

ギャップ萌え」

「そこっ!？」

「いやいや

ゲームの世界も

侮れないな…

じゃあ、多数決。

せゝの

「？」

「「？」」

「また！？今度は間違ってるからね？」

「どこにそんなおやじな

OLいるの！？」

「じゃあ、選ぼう」

「シカトっ！？」

ポチ…

『居酒屋！？』

「いいわよ！！良いところ

知ってるから行こっ！！！！』

「おやじかつ！！」

「またまたツツコんでしまった。」

「おお！居酒屋に入るぞ」

『らっしやい！！！！』

華蘭が

『大将いる！？今日も

いつものお願い』

「華蘭、常連かよ！！！！」

「さすがにこれは

ないわな（笑）」

慎治怜治が言った。

このゲーム、

絶対にネタだろっ！！！！

「次が最後の選択肢だ…
心してかかってくれ」

勝馬が調子をあげて
言った。

華蘭と主人公が

居酒屋から出て

公園のベンチに座る。

『私、いまちよつと

人生という道に迷って
いるんだ…。人生って

『この後、どこ行く？』

「じゃあ、選択肢は

？タワーで夜景を見る

？花火大会に行く

で？が…

「居酒屋で二次会」

「華蘭はおっさんなの！？」

誰がレストランで

ミミズ食べたあとに

居酒屋で酒のむの！？

てか、華蘭高校生だろ！？

未成年は飲んだら
ダメでしょっ!?!」

「いや…」

ここで勝馬君が
しゃべった。

「華蘭の設定は

コスプレ好きの

28歳のOLでバツイチだ」

「マジかよっ!?!」

これには慎治怜治も

びっくりと思いきや…

「28歳でこの若さ?

ギャップ萌え」

「そこっ!?!」

「いやいや

ゲームの世界も

侮れないな…

じゃあ、多数決。

せ」

「?」

「?」

「また!?!今度は

間違ってるからね?

どこにそんなおやじな

OLいるの!?!」

「じゃあ、選ぼう」

「シカトっ!?!」

ポチ…

『居酒屋！？』

いいわよ！！良いところ

知ってるから行こっ！！！！』

「おやじかつ！！」

またまたツツコんで
しまった。

「おお！居酒屋に
入るぞ」

『らっしやい！！』

華蘭が

『大将いる！？今日も
いつものお願い』

「華蘭、常連かよ！！」

「さすがにこれは
ないわな（笑）」

慎治怜治が言った。

このゲーム、

絶対にネタだろっ！！

「次が最後の選択肢だ…

心してかかってくれ」

勝馬が調子をあげて

言った。

華蘭と主人公が

居酒屋から出て

公園のベンチに座る。

『私、いまちよっと

人生という道に迷って

いるんだ…。人生ってどうすれば迷わなくて
すむんだろうね…』

「「重っ!!」「」「」

「てか、華蘭、

キャラ定まってるな!!」

怜治が言った。

「しかも、最後は

自分で打ち込まないと

いけないぞっ!!?」

「またもや沈黙…

私は

「なんて打つ…」

怜治が

「なんて…っつて

言われても…」

勝馬も悩んだ表情を

浮かべた。

ただ一人、慎治は

違った。カチカチと

携帯に打ち込む

「ちよつと慎治!?

勝手に何打ち込んでるのよ!?!?」

「いや、みんなが

悩んでるから…ね。

こんな感じでどう?

(馬鹿野郎! 人生は

迷って迷って初めて
オアシスなんだよ！
って打ってみた」

「いやいや、

さすがに無理でしょ？

だって彼女おやじよ？

もう十分人生の苦汁を

舐めてるのに…

そんな生ぬるい言葉じゃ

心動かさないでしょ!？

てか、あんたも星

出さないでよっ!？」

「可愛いでしょ」

「可愛くないわっ!」

ここで怜治が

「ちよつと…」

指さす方をみると

勝馬が泣いている…

「え…な、なんで

泣いているんですか？」

すると勝馬が涙を拭い、

「さっきの、言葉…に

か、感動してしまい

ま、まして」

「ホントにつ!？」

私はびっくりした。

「はい。深い言葉だと。

慎治君…君の言葉は

素晴らしいものがある

どうかその言葉を

華蘭に言ってくれ」

慎治を見ると真面目な顔で

「わかった…。

君の気持ちもこめて

伝えてあげる」

「ありがとう」

二人は固く握手した。

慎治が

「二人共、依存はないな」

ぶつちやけ、私は

どうでも良かったので

適当に頷いた。怜治も。

「いくぞ」

ポチ…。

『オアシスう？

そんなもんどこにも

ないんだよっ！たくよ！

甘ったれてんじや

ないわよっ！！』

「「嘘だろっ！！」「」

今回の活動報告…

華蘭はとてつもない
おやじフードファイターでした

以上

しよゝもなっ ！！

第六話 s u p e r w a r s

日差しが降り注ぐ

サッカーグラウンド。

右サイドで赤のユニフォームの

選手がドリブルしながら

颯爽と駆け上がる。

敵側のゴールラインに

近づく。

「センターリング!!」

中央の選手が

入り乱れる…

ボールが選手達の

頭上上がり、太陽と

重なる。

一人の選手がジャンプ…

したかと思うと

ほっそりとした

白い足が鋭く

太陽をとらえる!

「えっ!?!」

味方も敵も華々しい

一瞬のプレイに

衝撃を受けた。

「ピ。ピ。イ〜!!!!」

ゴールを知らせる笛。

キーパーも今し方

自陣ゴールにボールを
確認した。

「いいぞっ!! なな!!」

慎治怜治がベンチで
応援している。

「ナイスシュート!!」

ななちゃん!! これぞ
ハットトリックよっ!!」

女子サッカー部の

キャプテン寺島香奈が

はしゃいで言った。

「ピッピッピッ」

試合終了の笛がなった。

「オーバーヘッドシュートなんて

普通じゃ出来ないよ!

ななちゃんすごいな」

試合終了後もみんなから
賞賛を得た。

「何でそんなに

うまいの? いいなあ」

「サッカー部入ってよ」

いいでしょう?」

なななんて言われた。

結構嬉しかったけど…

「ななっ!! 今日弁当

持って来てないから、

買いに行こうぜっ!!」

群がるみんなを

かき分けて

「わかった!!」

今行くよっ!!」

慎治怜治の子守を

しなくちやいけない

からなあゝ…。

「すつげえゝな!!」

ハットトリックなんて!!しかも

三点目はオーバーヘッドシュート。

普通じゃ、考えられない」

今日は土曜日。

依頼でサッカー部の

助っ人で試合に出た。

小さい頃、サッカーが

大好きで三人で少年団で

土日やっていたけど

いつも強かったのは

私だった。

自慢じゃないけど、

クラブチームにも

誘われた。

「あとで、三人で

1対1で勝負なっ!!」

慎治が言った。

「やゝだゝ。慎治、

私からボールとれないと

投げ技するか、泣くんだもん」

「小さいときの
話だろっ!!」

焦ってる。

「いや、いまもだろ」

怜治が言った。

「俺も投げられた」

「はっ!? 怜治は

サッカーあんま

やんなかったし、

投げた記憶ないぞ?」

顔をしかめる。

弁当を買うために

店を探して歩道を

歩く三人。

「…」

沈黙する怜治。

「なっ? 何だよ…」

うるたえる慎治。

「あやとりを」

「「ひもかよっ!!」」

「ところで…」

怜治がいぶかしげに

私を見て

「何でボール、

持っているの?」

「ああ、これ?」

私が網に入った
ボールを二人に
見やすいように
持ち上げて言った。

「これ、香奈ちゃんが
私にくれたの。依頼の
お礼だつて。多分、
勧誘も少し入ってる…
今年のW杯モデルの
レプリカ」

「ふん」
納得したような音を
だす二人。

「スーパー、あるよ」
「ここで買うか」
もうお昼過ぎ。

土曜なのでお母さんに
負担をかけたくなかった
ので、弁当は買うことに。

二人は付き添いなので
ただ単に弁当を忘れた。

「もうお腹ペコペコ」
「鳴ってないぞ。」

「そんな音？」
真面目な慎治をスルー。
スーパーの入り口で
何故か、怜治が
立ち止まる。

「どうした、怜治？」

「ドアが開かない」

私が見ると

「自動ドアじゃないよ」

店内に入る。あまりにも

お腹がへっていたので

弁当コーナーに

一直線。まさか、午前中に

三試合やるとは…

「おかん、ガム買って」

「おかんって誰が!？」

我慢しなさい!」

「お袋、これ欲しい」

「誰がお袋だ?!？」

今日いくら持つてる?」

「500円」

「子供の金額!？」

じゃあ我慢しなさい」

と、まあこんな風

に二人がボケ倒すので

弁当を買うのに一苦労。

「よし、これにしよう」

「俺も決まった」

二人はカツ丼だ。

「野菜も食べなよ」

「おかんかつ!」

「うつうつ」

レジに進む途中、

怜治が

「トイレ行きたいわ」
私が「行けば？」と
言う

「鍵閉まっただ…」
悲しそうに言った。

レジは二台しかなかった
けど、空いていた。
コンビニにあるおでんが
あったので気が
そつちにいった。

湯気がでてる。

「おかん、この人変」
怜治が子供のように
指さし言った。

「だからおかんって誰？
指さしちやだめでしょ。
すいま…」

前にいる人を見たら、
言葉が詰まった。

黒い服、白いマスク、
黒いサングラス…

「えっ？」

「おいっ！！大きな声
出すんじゃないぞっ！
俺が金盗んでここから
出るまで騒ぐんじゃない
ねえぞ。

もし、騒いだら…」
と言って懐から
何かを出す。

(刃物！？)

「このフォークが
おでんに突き刺さるぜ！！！」

「「「……………」」」

「ひい！どうかおでん
だけは…お金はいくら
でも出すんで」
店員が怯えたように
言う。

「「「……………」」」
三人がぼそつと言う。
「「「会計をして下さい」」」

店内には私達三人と
店員さん、犯人、
トイレのジャック犯。

「とりあえずお前ら
警察にでも通報して
みてみる…」

こいつの大事なおでんが

吹っ飛ばぜ!!」

店員さんはまたもや

ひい!と言った。

「わかったけど…」

何でフォーク?」

慎治が怜治と私を

見てコソコソと

言った。

「さあ?何でだろ?」

私が言った。

「知らん」

怜治が言う。

「こら、何ぼそぼそ

言っただ!?!お前ら

慎治がまだ言う。

「多分、あれだぜ…」

台所にナイフとフォークが

あって、とつてが

似てたから間違った

パターンだぜ」

「え、普通間違え

ないでしょ…」

有り得ないよ」

「俺、あやとりのひもと

ロープ間違えたこと…」

「でも、分かんないぜ、

急いでたかも…」

「途中で気付くでしょ」

怜治が

「前に割り箸で強盗が

あつたけど馬鹿さ加減は
こっちの方がウケピク

「こおおおらあああ！……！！……！！……！！」

犯人が叫んだ。

「何！？お前ら！！」

聞こえないとでもっ！？

聞こえてるよ！ねえ！？

強盗なめてんの？

「……いや全然」「……」

「何その言い方！？

なめてんでしょ！？

ああ、そうですよ！！

間違えちゃったよ！！

だから何！？

「間違えたの！？」

「認めれば

良いんでしょ！？

ハイハイそうですよ

急いでました、

気付きませんでした、

さっき出してから

わかりました、

正直かなり焦ってますけど……！何か！？

「ここまで来た

根性なめんなよっ……！！」

犯人は逆上した。

「まあまあ、

落ち着いて」「

慎治怜治が宥める。

「店員さん、

何でおでんで

ビクビクしてるの?」

私が聞いた。店員さんは

「店長が無類の

お、おでん好きで…

(俺のおでん傷付けた

奴はクビだ、クビ!!)

つて言うんです」

(なんて店長だ…)

「聞いたことがある」

「えっ!?!」怜治が

真面目な顔をして

語り出した。

「このあたりに

おでんを極めた男が

いると…その男は

おでんを極めたあまりに

(三食おでんじゃね〜

と死ぬぞ)と言いながらも

三食納豆を食べる奴が

いると…」

「文脈おかしくない?

納豆っ!?!」

犯人が突っ込む。

「それを知っていて

おでんを人質にする…
なんて卑劣」

睨み付け慎治が言う。

「えっ！？俺が悪いの？

店長の暴君さの方が

異常でしょ！？」

「ええい！こんな悪党は！！」

慎治が私が持っていた

カゴの中に入った

カツ丼を取り出して

レジに置いた。

「カツ丼…食うか？」

「いや、食べないよ！？

てか、刑事ドラマ！？」

「食べないか…。

あんまり無理するなよ

田舎のお袋さんが

心配するぞ」

「だから何！？

まだ続くの？」

「夜なべしして…

作った手袋」

「何この茶番！！」

私はじっと

していられなくなった。

「あんた何しに来たん？」

私の一言で犯人は

我にかえった。

「そうだっ！！」

早く金だ、金！！

早く詰める！！」

「ひい！分かりました

お願いですから、

おでんには〜！！」

「わかったから

早くしろ…」

「無駄な抵抗は

よしなさいっ！！」

いきなり、店内に

響きわたった。

「おいっ！？何だ！？

お前から警察呼んだんか？」

私も慎治も店員さんも

何もしていない…

あれ？

「抵抗はよして

早く出てきなさい」

外からではない…

店内から聞こえる。

「怜治がない！？」

私と慎治が驚く。

「何！？早く奴を探せ！」

犯人が言うので

店内をくまなく探すと

「人質を

とろつなんてふざけた
真似しないで早く
出てきなさい！！
さもなければ、
強行突破もしくはは、
私の膀胱が破裂する」
拡声器を使って
怜治がトイレに
呼びかける。
「ふざけた真似は
お前だ！！」
犯人と私が突っ込む。

「もう我慢出来ない……」
犯人がブルブル
震えながら言う。
店員さんを羽交い締め
に
フォークを首につきつけた！！

「ホントにおとなしく
しないとこいつの
首をホントくにクビに
してやる！！」

「お願いします！
ふざけないでっ！！」
店員さんが懇願する。
泣きそうだ。
もう、危険だ……

見ていられない。
私の背筋を緊張の
汗が伝う。

三人は近くにいたので
顔を動かさず、
バレないように
最小限の口の動きで
話し合った。

三人が頷く。
「動くなよっ!!」
じりじりと下がる
犯人。すると、三人が
バツと散った。

「動くなっ!!」
フォークを首にさらに
あてる。

怜治がぼそつと
「おじさん…
馬鹿だね…」

「うるせ〜!!!!」
お前に…」
腕を伸ばし、怜治の
方向にフォーク向ける。

「いわれ…」
その瞬間、ななが
ボールを犯人の腕に
シュート!!

「私達…」
「いてっ!!!!」

フォークが宙を舞う。

すかさず慎治が

犯人の腕をつかみ、

「WJCに……」

背負い投げ！

一本！！！！

「挑むなんて……」

怜治が創作あやとり

ならぬ、創作縛りで

縛り付ける。

早い！！！！

「いや〜、

なんとお礼を

言ったらいいか……」

後日、WJCの部活に

店長がきた。

「あなた達が

居なかつたら、私は

今、路頭をさまよつて

いたでしょうに……」

「……いえいえ……」

三人が謙虚に言った。

「当然のことをした

までです……」

あまり気になさらず……」

「いやい〜やつ……」

店長がメタボな腹を
更に突きだし

「強盗に立ち向かう
何て普通じゃ出来ない

しかも、店内を

あんなにくちやくちやくに
した犯人にですよ？」

「はっ？」「はっ？」

そんなに暴れたっけ…

「全く、ホントに

損害額が半端な
額じゃないんですよ…

しかも、所々に

跳ね返ったように

円型の痕跡で壊し…

どうしました？」

ななの顔から

血の気が失せた…

第七話 ナンバー10

ささっ！活動報告！
いつもながら部室に
三人が集まりました。
慎治怜治がなんだか
悩み事があるようです。
私が来客用ソファアー
テーブルの向こうの
ソファアーに二人が
座っています。
二人とも、心なしか
重い雰囲気醸し出し、
苦悶の表情を浮かべて
います。

「で…悩みつて？」
私が聞くと二人が同時に
溜め息をはきました。
普段は明るい二人が
ここまでとは…
と思いましたがこの間も
騙されたので簡単には
心を許しません。
「なな…。今回こそ…
重大な悩みだ。
俺と慎治のことを
よく理解してくれる

ななにだけ打ち明ける。

慎治」

すると慎治は頷き、

「今日、話すことは

他でもない、この部活に

ついてだ……」

真面目な話のようだ。

二人が真面目なのは

この部活の活動だけだ。

この部活は創立が

適当なだけに常々

何かあつたら（廃部）

と言われかねない

思っていた。

「どんな話？」

いよいよヤバいのかな、

と考えた。

「実は……」

「意見箱に依頼が

溜まりすぎている。

大半がななへの

ダジャレ添削……」

「ええ！！私？」

まだダジャレ来てるの？」

真面目な悩みかつ

私のせいかな…

しかし怜治がまだ

話す、

「それだけじゃない、

俺達二人にも難しい、

解決方法が見当たらない

依頼がきた。

あまりななには

負担はかけたくない

けど…」

何だ。二人とも私を

気遣ってくれていたのか。

ちよっぴり嬉しい。

「いいよ！！私だって

WJCの部員なんだから

負担なんか考えないで！

私達、幼なじみでしょ？」

私は笑顔で二人に

気持ちを伝えた。

すると二人は一瞬

驚いた顔をしたが

すぐに微笑み、

「「そうだったな。

じゃあ、この依頼も

三人で解決しよう」」

「うん！！」

快く答えた。

「だけど」

慎治が

「この依頼は俺達は
もう悩みに悩んだから
もう分からなくなった。
最終的な判断はななに
任せるよ」

「ど〜んときなさい」

威勢よく胸を叩いた。

私、活躍の予感

「で、依頼って？」

「「替え歌」」

「替え歌つ〜！！！！????

しよ〜もなっ！！」

「正確には替え歌じゃなく

歌詞の間違いを正して

合ったものにして

欲しいそうだ」

「何それ〜？

わっけわかめだ〜？

さっきの青春ドラマ

パートはどこいった？」

ケロリと怜治が

「作者が遊んだだけ」

「なんなんこの作者！

ちよいちよい遊ぶな！

てか、黙って流したけど

第4話にもでてるだろ！」

「出てません」

「「何で答えてるん！？」「」

「話を戻すぞ。

この依頼は二階堂君が
依頼人」

「また。何でこの人

うちの部活なめてる？」

「「二階堂君はなめてない！！」「」

二人がカットした。

この二人仲良いんだった。

「はいはい。

で、どの歌？」

本題に話を戻す。

「数字の1は」

なあに？」

「もくもく〜煙突」

慎治怜治が歌う。

「その歌のどこが

気に入らないの？

煙突に似てない？」

私が普通に聞くと

「「二階堂君曰わく…」「」

「他にも無限の可能性が
あるからその可能性を
発見して欲しいそうだ」

「何それっ!?!」

二階堂君はその歌に
何を求めてるん!?!」

「二階堂君曰わく…」

「宇宙の広がり、
だそうだ」

「そんなに深いのか!?!」

ただふざけてるだけでしょ!?!」

「二階堂君は

ふざけてなんかいないっ!?!」

(ああ〜こういう二人の
ノリはウザいなあ〜)

なんやかんやあって、

「早速、始めよう!!
限らない宇宙の
探求へっ!!」

怜治が言う。

(ノリッノリだな…)

先行きが不安になった。

「では、まず始めに

進め方の説明に行こう!!」

(某ネズミの国の

アトラクションを

説明する人かいなっ!?)

心の中で突っ込む。

「三人にそれぞれ、

フリップボードがある。

そのフリップボードに

それぞれが合うと

思う歌詞をかいてくれ」

(なんでわざわざ

フリップボード?準備よ!!

絶対悩んでなかったな)

「絵でも構わないよ。

では、始めよう!!

数字の1は

なあに?」

「何このテンション?」

三人が書き始めた。

数分後…

「じゃあ見せ合おう!

まず、慎治から」
今日の司会進行は
渡瀬怜治が担当します。
慎治がフリップを出す。

「フとよく間違える」
「自己の問題だ〜！」
おもわず突っ込む。
「いやいや、字が
汚いと間違えるべ〜？」
「いやいや、
せめて物にしない？」
「はんせ〜してま〜す」
「こ*ぼっ!!!?!?
反省してないよね!?!?
それっ！」

「「まあまあ」」
怜治が
「次は俺〜。
数字の1は〜」

「「^{まては}君〜」」
「誰っ!?!?やりたい

ほうだいだねっ!?!」

「何だよ。」

そこまで言うなら

ななは凄いもの

なんでしょう?」「

「うっ…私は…

良いの思い

浮かばなかったから…

単純だよ…」

「じゃあくなな!

数字の1はくなあに」

なながフリップを出す。

「火かき棒」

「火かき棒!!!!」

ななのフリップには何故か

1と何か棒人間が…

「をもつトム」

「外人でできたっ!!!!」

慎「てか、火かき棒?

日本は使わねー!

海外の暖炉ある

暖かい家庭かつ!！」

激しいツッコミに

ななは弁解する

「いいの！！トムは
アメリカ北部出身で
冬の暖炉が大好きな
おばあちゃん思いの
優しい子なのっ！！」
怜「トムにそこまで
ストーリー性がっ！？
ありえないけど…」

採用っ！！！！」

「「いいの！？」」

「二階堂君の求める
広がりがあるからな。
では次：数字の2」

三人がかく。

「よし、行こう！
じゃあ慎治。
数字の2は
なあに？」

「素数で偶数」

「「ごもつとも!?!?!」

「ただ他は!?!?!」

「当たり前だけど…!?!?!」

慎治はどや顔で言う。「そこに深さが…!?!?!」

「次行こう、怜治」

悲しそうな顔の慎治。

「俺だな。数字の2は、
なあに」

フリップボードを出す。

「逆さまにすると

フックじゃない?」

「「いや見えない」」

「ガーン」

「ななは…どうなのよ?

数字の2は、
なあに?」

「二郎くん」

「「また人!?!?!」

「かまた誰?」

しかもこの人次男だろ」

「ふっふっふ、残念」

ななが笑う…

「長男よ!!」

「なんで勝ち誇った顔!?!」

「3いこ!3!

数字の3は

なあに?」

「慎治行こう!

数字の3は

なあに?」

「横にすると

I・m love・n it!!」

「ダメだろ!!」

会社に訴えられるわ!」

「マクド ルド」

「言うなあ〜!!」

とまあ、こんな感じに
替え歌を作りました。

次の日、部屋に
二階堂君が来た。

「久々だな！
好敵手^{ライバル}達よ！」

爽やかな笑顔を
振りまく。

イケメンなのに
残念だ（笑）

来客用ソファーに
堂々と座る。

「先日頼んだ、
依頼の解答だが…」

今日はダジャレなしの
真面目に行こう！！

宇宙の広がり
見つけられたかな？」

「もちろんだっ！！」
「
慎治怜治が気合いを
込めて言う。

スイッチが入った。

「ふっふっふっ…」

さすがだ、
好敵手^{ライバル}よ。

では聴かせてくれ！！

宇宙のロマンをつー!!」

「行くぞー!! 慎治!!!!」

「任せろー!! 怜治!!!!」

「せーの」

数字の1はなあに?

トムと火かき棒

数字の2はなあに?

逆にするとフックの

素数、偶数

数字の3はなあに?

I ' m l o v e ' n i t ! !

数字の4はなあに?

よよんがよん

数字の5はなあに?

ゴリラン

数字の6はなあに?

トランプ、UNOでは

癖もの (9と間違っ)

数字の7はなあに?

丸付けるとおばあちゃん

。 7 by トム(笑)

数字の8は〜なあに？

男子トイレの男の人

数字の9は〜なあに？

くせ〜んだよ！！お前！！

俺のばあちゃんと

同じ臭いするぞっ！！

加齢臭かつ！！

あっ！？ばあちゃん！！

ごめん…うそ…いて！

痛い！！マジごめ…痛い！！

痛い痛い痛い痛い！！

もみあげはやめ…痛い！

耳も…ホント…

ぎいやあ〜…！！！！！！

「」どうだ…？「」

慎治怜治が緊張の

面もちで二階堂君の

解答を待つ。

二階堂君は黙ったまま…

緊張感がただよう…

「おすがこころはない」

第八話 弟

大通りから一步入る。

薄暗い裏路地が口をあけ

待っている。

入ってしまえば、

無事には出てこれない。

俺は入ってしまった。

たった独りで…。

俺はひたすら待つのだ…

暴力の嵐が収まるまで。

ずっと堪えるのだ…

自分の愚かさと後悔の念に

打ちひしがれて

しまわないように…。

「おいっ!!!!」

どこからかずっと遠く、

光がさした。

ようやく終わるのかな？

この壮絶な嵐も。

「なんだあ〜？

お前は？文句あんのか？」

「やめてやれよ…。」

もう充分だろ」

まずい…俺は無関係な
他人をも嵐に巻き込むのか…。

「よそのやつは

ひっこんでろっ！！！」

ああ、俺は

なんてやつだ…

他人に矛先を向けた。

腕が、拳がうねり

頬を直撃しかけた瞬間、
ぱしっ！！

「スローすぎて

あくびがでるぜ」

と言ふなり人を背負い

地面に叩きつけた。

そして、トドメの一発…

腹部に突き刺した。

「なんだてめは！？

俺達を相手しようてか？」

「お前らがまだ

この人を殴るんならな？

もしくは俺を相手に

しようならな？」

不気味に嘲るように

笑った。

しかし、その微笑には

ひとかけらの影が
あった。

「やっちまえ〜!!!」

10人もの男が独りの
男に襲いかかった。

「ふ〜…仕方ない」

風が過ぎ去った。

と思うと…。

嵐は止んだ。

俺は助けられた。

この無関係な他人に。

この人は俺の恩人だ。

「大丈夫か？」

手がさしのべられた。

「ありがとうございます」

「いやいや」

俺を立たせてくれた。

その人は俺に背中を

向けたまま、手を振る。

「じゃあ、これで」

「あのっ!」

「うん？」

かすかにこちらに

顔を向ける。

「俺を舍弟にして下さい!」

「と、いうわけでは
WJCの部室。今日は
来客用に慎治が座る。」

「舎弟が出来ちゃった」

「うん…。で？」

怜治、ななは冷めた
テンションで頷く。

「じゃあ、呼ぶぜ？お…」

「待て待て待て！！」

ちよい待ち！何当たり前の
ように始めてんの？

てか、来てんの？

てか、舎弟の意味

知ってる？」

「おい！！慎哉！！」

「聞いてる！？」

三人が部室のドアを
見る。

「どんな人が来るの？」

「俺に聞かないでよ…」

なんか緊張してきた…」

しかし、なかなかドアは
開かない。

「あれ？」「」

しゅん。

全く動こうとしない。

「慎治嘘つくなよ」

「嘘じゃない…」

「おい慎哉あゝ！！」

「慎哉あ！！！！」

「てこでも動かない。

すると…ガラガラ！！」

「なんすかつ！？」

「「「窓つ！！？」」「」

「と、いうわけで

俺の舎弟の岸本慎哉だ」

「うす！」

「訳がわからない間が生じた。

「おおふう」

「うん」

「また沈黙。」

「岸本慎哉つす。

「慎治アニキの舎弟つす」

「「「慎治アニキ？」」「」

「今日は慎治アニキと杯をかわせられた

「怜治アニキと

「ななネエサンに

「お会いしたくきました」

「「「怜治アニキ？」」「」

「「「ななネエサン？」」「」

二人とも眉をひそめ
微妙な顔をする。

慎治が説明するように
「こいつは一昨日まで
極道を目指してたから
変なしゃべり方なん」

「ふん」

慎哉が頭を下げて、

「今日は慎治アニキの
シマでの仕事ぶりも
見にきました」

ここでななが身を
慎哉に向けながら

「どうして外にいたの？」

「ああ、俺も

気になった。どうして？」

慎治も聞いた。

「うす。慎治アニキの
御命令通りドアに
いたのですが、他の
組のモンがいないか
調べるため部室の周り、
20周しました」

「うす。なんでも

このあたりじゃあ、

瑛組えいぐみが

頭はつてるとか…」

「瑛組？A組でしょ!？」

「うす。ななネエサンが

言うならそれです」

(うわあくめんど
なんが来ちゃったな)
ななは心でつぶやいた。

「まあ、今日は
ゆっくりしていつて」

「うす。あざす」

ぺこりと頭を下げる。

礼儀正しいな。

「じゃあお茶、
入れるね」

数分後、あつあつの
お茶が入った。

「慎哉くんのも」

「じゃあ飲むか」

「ちよつと待つて

下さいっ!!!」

慎哉が叫んだ。

おもむろに立ち上がり、

慎治の湯のみを

指差す。

「慎治アニキ!!!」

俺が毒味しますっ!!!」

「「「毒味!?!?!」」」

「他の組のモンが

慎治アニキを狙い、

この学校を牛耳る

つもりかも知れない!!」

「「「ないないない!!」」」

ガシツと湯のみを

つかみ、

「いきますっ!!」

「「「どこに!!」」」

慎哉がお茶を

勢いよく飲む。

「あちい〜!!」

「おでんコント!」

「止める止める!!」

「火傷薬カモン!!」

「大丈夫かよ?」

怜治が慎哉に言う。

「大丈夫です。」

「毒はなかったです」

「意味が違う!」

慎哉の唇は驚くほど

赤く腫れ上がっている。

「もう、慎哉くん? だっけ

お茶はいいから……」

すると、部室のドアを

ノックする音がする。

ガラガラ。

「ななあ〜」

「朝華」

ななの友達の山崎朝華

(ともか)が入って来た。

すると慎哉が朝華の
真正面に立ちはだかり

「なんだ、お前は？」

どこの組のモンじゃあ」

鋭く睨みつけ

朝華に言う。

朝華は少し考えて

「三組」

「燦組だとお？」

ななネエサン、どこの

組ですか？手え組んでる

とこつすか？」

朝華が慎哉をよけて

「おつす なな」

「何ななネエサンに

気安く話し掛けてる？

なめてんのか、アマ

こらあ！！！」

「甘いコーラ？」

当たり前しよっ」

「勘違いも

甚だしい！！！！」

慎治、怜治、ななの

満場一致の突っ込み。

(慎哉くと朝華は

絶対に合わないな)

そう思ったななだった。

朝華に出て行って

もらった部屋は

一旦落ち着いた。

「ところで慎哉、

何でグループと

ケンカしたんだ？」

怜治が聞く。

「俺も聞いてないな。

教えてくれ」

慎哉の顔に一瞬、

陰りが見えたように

ななは見えた。

慎哉はケロツと

答えた。

「グループのリーダーの

大好きなゼリーフライを

食べたからっす」

「ゼリーフライ!!?」

ゼリー揚げちゃったあ!!?」

ななが言う。

「てか、リーダー

心せまつ!!!食べ物で

ケンカ!?!」

「前のやつは冷凍庫の
ゼリーを食べて
グループを抜けました」
「リーダー暴君すぎっ!!」

「では、そろそろ。
お邪魔してすみません
でした」

「『いやいや』『
また来ても良いですか?』」

慎治が

「いつでもこいよ。

今日は楽しかったぜ」

「じゃあ、帰ります」

慎哉が立ち上がり、

ドアを開ける。

三人も立ち、校門まで
送った。

「じゃあ、また。

慎治アニキ、怜治アニキ
ななネエサン!!」

手を一通り振って

慎哉は帰って行った。

姿が見えなくなる。

すると慎治が

「あとを追う」

「「なんで？」」

なな、怜治が顔を
しかめる。

「あいつ、今日一つ
嘘をついた。

グループ抜けた理由：

あの時、一瞬

表情が曇った」

よく視てるな。さすが
慎治だ。

「あと…胸騒ぎがする
見てて危なっかしい。
昔の俺に似てるから
何か放っておけない」
ななと怜治を見て

「良いか？」

「慎治がそこまで

言うのなら、あと…」

怜治がななを見て、

「慎治の弟なら

私達の弟でしょ？」

三人で慎哉を尾行した。

すぐさま、慎哉に
追いついた。
変わらない歩調で
歩いて行く。

左、右と何回か
曲がった。
時々、細い道を通り、
大通りに入ったり
出たりした。

細い道は人が少ないので
気づかれないように
細心の注意を払った。
また二、三度慎哉が
振り向くので急いで
影に隠れた。

一心不乱に歩いてる
ので目的地があるらしい。
尾行開始、30分。
白い建物に慎哉が
入っていった。
「これって……」
ななが見上げる。
病院だった。

慎哉の目的は。

赤い十字が描いてある。
結構新しい。

壁の白さが塗りたてだ。

「入ろう」慎治が

先頭にたつていく。

エレベーターに慎哉は
乗る。

止まった階数を見て

ダッシュで階段を

駆け上がった。

「病院では静かに」を
完全に無視した。

ギリギリ、慎哉が

ある病室に入るのを

見ることが出来た。

病人のプレートに

「岸本 美里様」と

書いてある。

三人は病室のドアを

微かに開けて

漏れてくる会話を聞いた。

「…かあさん、大丈夫？」

「今日は調子が

とても良いのよ」

「そう良かった…」

あんまり無理するなよ」

（慎哉のお母さんか…）

「ごめんな… かあさん。
俺がこんなだから…」

「慎哉が悲しげに言うのが
聞こえる。」

「いいのよ。お前を
育てたのはかあさん。」

「かあさんこそ、お前に
苦しい思いをさせて

ごめんね…」

「いや、俺が悪いんだ。

俺が不良グループに

入っていったばい

他人に迷惑かけて

かあさんに責任を

押し付けたから

かあさんは病気に…」

二人が静かに

泣き出したのが

三人にはわかった。

「俺、グループを

抜けたよ… 抜けるとき

殴られたりしたけど

今までのツケが来たと

思ってた我慢した」

「うん、うん。大丈夫？

痛くなかった？

かあさんのせいね」

「かあさん…。」

そしたらね。

見知らぬ人が助けて

くれたんだ。

今まで、散々迷惑を
掛けてきた他人だよ。
横河慎治っていう人。
俺はこれからその人の
ために、そして
迷惑かけてしまった
周りの人…
見知らぬ人でもいい。
償いだと思って、
償ってかあさんの
病気が早く治るように
みんなのために
生きるよ」

「慎哉……」

「ありがとう」
二人は数分間、
静かに泣き合った。

「帰ろうか？」

ななが言う

慎治 慎治は頷いた。

病院の外に出て

三人は初めて

口をきいた。

「お母さんに

迷惑かけないように

グループを抜けたんだね」

二人は黙っていたけど

それは同意の相づち。

それから三人は

それぞれで過去に

思いを張り巡らした。

夕焼けに染まる空の下、

ゆっくり歩きながら…。

15分後、三人の後ろから

ママチャリに乗った

おばさん二人が

近づいてきた。

俺はまたのまれたのだ。

これは罰だ。

今までの、過去の、
精算だ。

耐えなければ、

耐えなければ…。

かあさん…

腹部を蹴られる。

「うっ」

血が口からでる。

「てめえ、ただで

抜けられると思うよ」

顔を複数回、拳が

襲う。

腫れ上がるのが分かる。

罰だ。罰なんだ。
償えば、かあさんの
病気は治る。

鼻血が溢れる。
生温かい血が顔を
覆う。

「お前ら、そのの
棒とれ!!」

「これっすか？」
何ニヤニヤ笑ってる。
俺はもう変わるんだ!!
変わってやる!!!

三人が棒を持ち、
俺を殴り続ける。
背中、頭、どこでも
いいのか?
適当に殴られる。

罰なんだ…。
耐えなくちゃ…。
でも…。

「何泣いてやがる…
バット貸せ」

「いや…さすがに
もうまずいっすよ!?!」
「いいから貸せっ!!」

バットを引つたくり、
両腕で力の限り握りしめる。

バットが勢いよく
振り上げられる…

(ごめん、かあさん。

俺はもう死ぬ)

「変われなくてごめん」

一粒、涙が落ちる。

ブンっ！！

ドカツ！！

「何やってんだ？

慎哉！？」

「えっ！？」

慎哉が見ると

慎治が身代わりに

頭にバットを食らっていた。

血がポタポタと
慎治の顔と顎を伝い、
コンクリートに
吸われていく。

「なんだ！？お前は？」
リーダーがたじろいだ。

「慎治アニキ、
どうして？」

「まあな、色々とな」

慎治がバットを
奪い、投げ捨てた。

「アニキ！逃げて下さい。
この間の奴らは
弱かったけどこいつらは
かなりつよ…」

ふらつと慎哉は
倒れかけた。

慎治が抱きかかえる。
「人の心配するより、
自分の心配しろ」
慎治は壁際に慎哉を
寝かせた。

「おいっ！！どこの
どいつだが知らねーが
そいつを守ろうってん

なら容赦しないぜ？
そいつはグループを
抜けようとした挙げ句、
俺のゼリーフライを
食ったんだからな」

慎治はまた不気味に
笑った。

「こつちの台詞だ！！
過去の自分から
変わろうとしてる奴の
邪魔する奴は…」
慎治は構えた。
あらゆる格闘技の
構えを混ぜた慎治
特有の構えだ。

「俺が許さねえ！！」
足をする。
ジャリと音がした。

「きなつ！！」
5人一気に襲いかかる。
慎治に届く直前。
サッカーボールが
5人を殴打した。
5人は気を失った。

遠くからななが

「あと15人…」

ななを見つけた

不良達5人がななを

めがけて走りだす。

「女!!!なにしゃがる!!!」

ななは微笑を浮かべる。

ななまで届く前に

怜治が準備した

罠にかかり足を

奪われる。

怜治がニヤリ。

「あと10人」

「くそっ!!!何なんだ!?!」

こいつらは!?!」

周りがうるたえだす。

「黙れお前ら!!!」

まずは全員で最初の

奴を集中攻撃だ!!!」

慎治に狙いを定めた。

微笑する慎治。

一瞬、風がふく…

「あと0人」

10人が一瞬にして
のされた。

辛うじて意識が

あつたのはリーダー。

慎治が近寄り

「二度と俺の弟に

手を出すんじゃねえぞ!!」

慎治が慎哉を背負い、
道路を歩く。

「アニキ達、どうして?」

慎治は溜め息をついた。

「何でもかんでも、

自分独りで抱えるな…。

お前は俺の弟なんだから?

弟の罰や痛みなら

俺も背負ってやるよ」

怜治が

「俺達だ!俺た、ち…

慎治の弟は…」

「私達の弟よね」

「怜治アニキ、
ななネエサン…
ありがとうございます」

WJの部室。

「おい！慎哉あゝ
いるかあゝ？」

三人がキヨロキヨロ
探す。

「呼びましたあ！？」

「……ドアから入れっ！！！！」

部員じゃないけど
新たなメンバーが
加わった。

第九話 亀羽目球

さあ、今日も変わらず
活動報告しよ

本日は晴天なり。

雲一つ見つかりません。
しかし、私達WJCは
いつものように部室で
うねうねしていました。

「怜治、新作できた？」

「いや、まだまだ慎治。

もう少しかかる」

「そうかあ、大変だな。
手伝おうか？」

「じゃあ、少し頼む。

そこちよつと持って」

「ここか」

「あ、ちよつと違う、
離して、そこでもない！

おい、引つ張るな！！

ちよ、おタあ……！！」

そのとき、勢いよく
ドアが開いた。

「みんないる！！？」

…て、何で慎治君と

怜治君、紐に絡まってるの？」

「怜治の創作あやとりの手伝い」

「何それっ!？」

「創作あやとりとは従来のあやとりの

常識を……」

「ハイハイ、わかったから

慎治と怜治は黙ってて。

香奈、どうしたの?」

やっと二人の会話を

止めることができた。

私は少し嬉しかった。

さっきからあやとりしか

やってなかったし…。

女子サッカー部の

キャプテン、寺島香奈は

私の友達で部活がない時

よく部室に来てくれる。

慎治、怜治も仲がよい。

「ああ、ななちゃん。

あのね……」

「ふうむ、落とし物ね」

部員よりのソファーに

慎治怜治がすわる。

私と香奈は来客用。

怜治が頷くように

言ったあとに香奈が

「ごめん。この三人の

部活とは違う活動だけど

手伝ってくれる？」

申し訳なさそうに

うつむきながら言う。

「なぐに言ってるんだ？

俺達と師匠の

仲じゃないか！！

任せろって！！」

怜治が言った。

慎治と私も頷く。

慎治怜治にとつて

香奈はサッカーを

教えてくれる師匠なんだ。

「ありがとう、みんな」

私達三人が顔を

見合わせる

「で、何をなくしたの？」

「ああ、えっとね……」

「ドウル、ドラゴベ
ドラ ンボール？」

神龍に願ひ事？」「」

「違う、違うわ。」

ドウルグンボールよ…」

「何それっ！！？」「」

「ドウルグンボールは
サッカー史上

最珍最高と呼ばれる

名珍プレイヤー、

ドウルグンが試合中に

珍プレイをしたときに

蹴った数万個ある

プレミアな野球ボールの

ことだっ！！」

「何で知ってんの？

てか、珍プレイ？」

「しかも野球ボールっ！？」

何でなん！！？しかも

数おおっ！！」

最初に慎治、あとに

私が見つ込む。

「だいたいオークション

での相場は300、つまり

うま〜し棒30本分だっ！！」

「やすっ！！！！」

「ドウルグンはサッカーより

野球が大好きな

ルーマニア人なのだ」

「ルーマニアっ!?!」

「で、どこでなくしたの？」

一旦、落ち着きを

取り戻した私は香奈に
聞いた。

「家の近くの公園で

サッカーの練習を

してたんだけど…

夜になっちゃって

疲れたからベンチで

うとうとして。

寝ちゃったみたい。

起きたらなくなってた」

「夜!? ダメだよ! 香奈!

危なかったよ!」

私はびつくりした。

そんな危険なこと

女の子はしちゃだめだ。

「そうだぞ、師匠!」

珍しく慎治も真剣な顔。

語気も普段より

少し荒い。

「昨日は寒かったから

最低マフラーは

しなくちゃ!」

「そこっ!？」

怜治も頷きながら、

「毛布も必要だったな」

「注意するところ

違うでしょ!!」

「なかつたら

新聞紙やダンボールも

いいらしいよ」

「もう、いいって!!」

「ねえ、香奈、それ

どうして持ってたの?

サッカーの練習するとき

邪魔でしょ?」

すると

「私、弟がいるんだけど

まだ小さくていっぱい

甘えたい時期なんだ。

お父さんが大好きで

よく日曜日に

遊んでいたんだ。

だけど、ある日に

お父さんの単身赴任が

決まっちゃって…

弟が寂しそうに

してたら偶然に

ドウルグンの試合を見てて

「この人、お父さんみたい」

つて言ったの。だから
ドウルゲンボールを買って
あげたんだ。
弟は毎日、肌身離さず
持ってたの。
またある日、私が
ケガしたときに
早くよくなるように
つて私にくれた
御守りなの……」

香奈が話終わると
三人はぐすぐす
いいながら
鼻水たらして泣いている。

怜治が

「よ、よし!! ぜっだいに
見づげでやるぶぜっ!!」
「おぶあ〜!!!!」

「この公園だな」
「そうよ」

なんら変哲もない公園。
定番もブランコ、
シーソー、ジャングルジム

そしてかなり大きめの
滑り台を中央にして
それぞれが好きな場所に
収まっている。

「このベンチで

寝てたの」

香奈がそのベンチを
優しく手のひらで
さする。

「よし、このあたりを
くまなく探そうよ!!」

私が意気込んで
叫んだ。

「「おう!!!!」」

4人で搜索を開始した。
砂場や草むら、
各種遊具をくまなく
探した。

搜索開始から数十分。

見たことのある人影が。

「やあやあ、

ライバル達よっ!!
どうした?

こんなところで!!」

意気揚々と近づいて

来たのは前年度の

ダジャリストチャンピオン
二階堂君だった。

「二階堂君!!」

「奇遇だな!君達。

さては私とダジャレとは

何か?についてを

語らいにきたんだな!!」

(いや、違うけど…)

「二階堂君!!このあたりで
野球ボールを見なかった?」

慎治が聞くと

二階堂君は顎に手をあて
考えた。

「はてさて、野球ボール?

うん…

どうだったかな?

ああ!!その木に

引っかかってたよっ!!」

「ホントにつ!?

ありがとうっ!!」

香奈が二階堂君に

感謝を言う。

すると二階堂君は

何故か頬を赤くし、

「これは…ディステイニーだ…

運命だ…運命なんだっ!!」

一番下の怜治が言う。「わりい！なな。いて、痛い！！痛いって！！」

「ごめ、まじごめん！！」

「揺れるなあ〜！！！！」

土台の怜治が大きく

揺れた。そして崩れた。

どすん！！

「っっいつた〜っっ」

見ていた香奈が

駆け寄る。

「みんな大丈夫？」

「うんまあ、なんとか…」

て、あれ！！あれそう！？」

慎治の後ろに

白い球が落ちている。

慎治が拾い、香奈に

見せる。

「これがドウルゲンボールか？

師匠！！？」

「違うわ。これは…」

「ダルトンボールよ」

「はいつ!!?」

「だから、

ダルトンボールよ」

「説明しよう!!」

ダルトンボールとは

作者が「てきとくに

語感があつて

尚且つ変な名前の

ボールでいいや」という

感じで出来た、触ると

ダルトンなボールなのだ」

「こら!作者!ダメだろ」

そのあと、一時間

一生懸命に探したが

変なボールしか出ない。

バリトウボール

コルクボール

ドルフィンボールetc

「ああ!!!!なかなか
ないなあ!!!!」

4人が諦めかけていた。

「疲れたからちよつと

ベンチで休んでていい？」

「いいよ」

私はベンチに腰掛けた。

背もたれに思いつきり

よりかかり、空をみた。

すると、上空を

物凄い勢いで移動する

黄色い何かがあった。

「な、なにあれ？」

凝視すると一瞬、

空の一点が光った。

「どうしたの？ ななちゃん」

香奈が呼びかけた。

私は空を指差した。

「あ、あれ…

きゃ〜」

腕を勢いよく

振り上げたので

ベンチが倒れた。

「いたたたた…」

「大丈夫？」

香奈が焦ったように

言う。

「大丈夫だよ…いたっ！」

頭上から何か降ってきた。

何か、丸くオレンジ色だ。

私はハツとして

手にとり、香奈に見せる。

「香奈！！これでしょ！？」

「それはドラ ンボール」

「神龍~~~~~！！！」

翌日、神龍のおかげか
ドウルグンボールは見つかった。

空で戦っていたのは
野菜と猿だったかも…

カカロット！！！！

第十話 笑顔のお値段

業間休みの

横須賀総合学院

高等学校（略してよこつ）は
いつものように
賑わいをみせる。

廊下では走り回る

男子生徒。

教室ではニコニコしながら

おしゃべりを楽しむ

女子生徒。

普通の高校といたって

変わらない…

あるクラスを

除けば。

あるクラスの中央に

人だかりができている。

ワイワイガヤガヤと

やれいけ、これいけと

いい、何かに熱狂している。

すると廊下から

堅物学級委員長

金沢茜が入ってくる。

あかぶち眼鏡に

ポニーテール（馬の尾）

鋭い目：全ての

生徒達はこの目で

ひと睨みされると

黙る（ある二人を除けばだが）

「この人ばかりはどうした？」

近くにいた男子生徒を

捕まえて聞く。

「さあ？」

返答を聞くなり

「ありがとう」

と言い、群がる生徒達に
近付く。

かきわけにかきわけて

やっこの思いで

問題の核たちを

視界に入れることが

できた。

「やっぱりお前たちか」

きつい口調で

横河慎治、渡瀬怜治に

言う。

「お前たち、いい加減に

教室で暴れるのは

止めたら……」

茜の声が怜治の声に

遮られる。

「いつけー、俺の
スーパーカスタムアルティメット
ゴッドランスター!!!!!!」

「負けるな!!俺の
シンジドラゴンエア―
スラッシュバリアー!!!!」

「何それ!!」
ツッコむ茜。

茜の視線の下で
何やらカチっカチつと
音がする。

「休み時間にベーゴマ!?
昭和の子供かつ!!」

慎治のシンジドラゴンエア―
スラッシュバリアーがベーゴマの
バトルフィールドから
弾き出されたつ!!!!

「ふふふ」
怜治が怪しげな笑い。
「俺の勝ちだ、慎治。」

お前のシンジドラゴン…は
頂く!!」

「シンジドラゴン…
なんだたっけ?」

「忘れたのかよ!?!」
あかぶち眼鏡が
ズレる。

「ああ、俺のシンジドラゴンエア―

スラツシュゴリラーが
とられたっ!!」

「名前変わった!!」
「てか、怜治!!」
「昭和のガキ大将?」

ここで二人は初めて
茜の存在に気付く。

「あ、学級委員長」

「あ、じゃない!!」

怒りが頂点に達す。

「いい加減にしろ!!」

休み時間に問題を

起こすなっ!!」

「起こしてないよ」

「じゃあ、静かに

机に座っててくれ!!」

男勝りのデカい声で

言う。

「いつも静かじゃん」

悪びれた様子もなく

慎治怜治が言う。

「昨日の昼休み、

お前たちは何してた!？」

「インドの国技

カバディ」

「一昨日は!？」

「シンガポールの国技

セパタクロー」

「じゃなーーーーい!!」

まだ三人はガミガミと
言い合っている。

（慎治怜治が
からかっているだけ）

その様子を二人の
子守役的な感じの
狭山ななが苦笑して
眺めていた。

（慎治怜治なんて
真面目に相手していると
疲れるよ）と心の中で
茜にアドバイスした。

「ねえねえ聞いている？」
ななは慌てて視線を
前の机にいる友達の
山崎朝華に合わせる。

「ああ、ごめん。何？」
ふふやれやれといった
感じに首を横にふり
朝華が言う。

「だからあくMナルドに
行つた？」

「Mナルドお？」

「なな知らないの？
ちよちよオシャレな
ハンバーガー店で

今全国展開中の
ちよ〜人気店!!!
このあたりにも
できたんだ。あたし、
昨日行っただけど、
かなり良かったよ〜
すると周りにいた
女子達が話を聞きつけ
「Mドの話？」
「ちよ〜良いよね〜」
「オシヤレだよ」
「店員の方がスツゴい
イケメンで〜」

なんか疎外感を感じた
ななは少し焦った。
教室の反対側では
そんなことは
お構いなしにさっきの
三人がまだケンカしてる。
(もう一度いうが慎治怜治がからかっているだけ)

「委員長、この間の
政経のテスト100点
だったでしょー」
「それがどうした!？」
お前たち、もうホントに
次暴れたら鞭で
叩いてやる!!!」
「ドSやな」

慎治怜治がずらかり、
口論が終わった。
茜はハアハア荒い息を
していた。
（ご愁傷様）
そう眩くななだった。

帰り道。ななは慎治怜治を
引き連れて
Mナルドに向かっていた。
ななが頼んでみたら
一緒に行こうとかなりの
乗り気で返事してくれた。
しかし、何か裏が
あるに違いない。
何故なら、二人で
ずっとコソコソ話を
している。
「ねえ」
ななが問い掛ける。
「何か企んでるんでしょ。
教えてよ。今日は遠くで
見守ってあげるから」
すると
「WJCの活動だから
ななもやるんだぞ」
「内容によるっ」

すぐさまななが返答。

「Mナルドでは

スマイル、つまり

笑顔が無料らしい」

「ハイハイそれで？」

「俺達二人は考えた。

笑顔は持ち帰り可能か

どうかを」

「だから？」

「実際に店員に

聞いてみるんだっ
」

久々にきました…

しよゝもないこと…

「私、今日は活動報告に
専念するよ」

二人は顔を見合わたが

「たまにはいいよ」

と言った。

(やった)

Mナルドについて

慎治怜治が話す。

怜治が携帯で調べて、

慎治に言っている。

「Mナルド、

M字食べ物ポケ
ン」

「ポケ
ン!?嘘でしょ!?!」

ななが思わず怜治に
ツッコむ。

「オーナー兼本店店長は
横須賀総合学院

高等学校、つまり
うちの生徒らしい」

「すごいなあ」
高校生で社長か」

怜治が関心する。

「うわさによると

MナルドのMは

masochistのMらしい」

「「なんでっ!!!!?」

「オーナーがドMだから」

「「なんでやねん!!!!」

初めて関西弁で

ツッコむ怜治となな

であつた

「ドMなオーナーだから

店員はDSが多いのか？」

怜治が聞く。

「そうとも限らないだろ」

「でもさ…」

怜治が続ける。

「もしDSな店員なら

金沢いそうだな」

怜治、ななが今日の

茜の言動を思い出す。

「鞭で叩くからな！！！」
「いそいだっ！！！」

三人とも少し

ドキドキしてきた（笑）

Mナルドに到着。

外観は非常にオシャレ。

文句のつけようが

ないほどオシャレ。

言葉では説明出来ない。

（作者にその技量がない
とか言わないで…）

店内はさらに

オシャレで落ち着いた

雰囲気で普通の

ハンバーガー店とは

正反対。高級レストランみたいだ。

（これじゃあ、

売り上げも伸びるわ。

女の子はこういうの

大好きだもんな〜）

と、ななは思いながら

空いてる席を見つけて

座った。慎治怜治も

続いて座る。

「私、最初に頼んで来る。
そのあとに二人で

やってよね」

「了解」

ななは手早く注文した。

普通にハンバーガーと

コーラを注文。

「以上でよろしいですね」

店員さんがニコニコと

頼んだものを繰り返した。

「あ、…」

カウンターにある

メニュー表の下、

「スマイル 0円」に

目がいく。

「どうなさいました？」

その声に我に返り、

「あ、すみません。

それだけで…」

「かしこまりました！

少々お待ち下さい」

（なぐんだ！良い店。

怜治なんてあてに

ならないなあ。全然

DSな店員さんなんて

いないじゃん）

「お待たせしました」

ななは自分の

ハンバーガーを持ち、

テーブルに戻った。
カウンターがよく見える
位置にしたのは
二人（慎治怜治）を
監視するためだ。
（さすがにこんな
落ち着いた店では…）
と、ななは考えたが
なながテーブルに戻るや
いなや、怜治が
立ち上がり、
「行つてきます!!
姉御!!」
と敬礼し、ななに
ツッコむ暇を与えずに
カウンターへ。
（まずい…）
ななは大波乱を予期した。

怜治がカウンターに
到着。
あいにく、並ぶ人は
いない。
「ご注文は何になさいますか？」
さっき、ななを接客した
店員さんだった。

「うーん…と」
怜治が悩むふりをする。

「あなたの笑顔をお持ち帰りで」

「お断りしますっ!!! W W W
このダサ男!!!」

「断られたあ——!!!」

テーブルに帰還した
怜治はダサ男の
シヨックで魂が
抜けて、顔が死んでる…。

慎治が笑顔で
「ドンマイ、ダサ男」

ズッキューン!!!

怜治のハートが壊れた。
壁に頭をつけて、

「どうせダサ男ですよ。

ダサ男ですけど何か？

ダサ男だよ〜ん。

ダサ男ダサ男ダサ男…

俺なんか…う、うう」

ついにはいじけた。

涙が少しヒカル（笑）

「次は俺が行くぜ!!!」

勢いよくカウンターへ。

慎治が挑戦しに行く。

だが、言葉とは裏腹に

怜治の失敗を懸念して

店員の顔を見ないでいる。

「注文は…？」

慎治は店員の声を

聞いた。

（ちよつと太い声だな）

慎治は思った。

怜治と同じカウンター。

「あなたの笑顔を

お持ち帰りです」

「ウフフフ、元気な坊やね 食べちゃいたい」

ゾツとする慎治の目の前には

筋骨隆々の青ヒゲの

男性が……!

「笑顔だけじゃ、めっ

ワタシごと

テ・イ・ク・ア・ウ・とん」

じりじりと後退りする

慎治。

「あの〜……」

「なあに、坊や?

早く答えないと

食べちゃうわよ」

「やっぱいららないです……!!」

慎治が早口に言い、

猛ダツシユで逃げる。

「「逃げた……!!」」

店員とななが言った。

「もんっ!! シャイな

坊やねん」

慎治はこのあと
一度もMナルドに
来ようとしなかった…

「くっそ、
もう一度行ってやる!!」
ダサ男発言から一時間後
立ち直った怜治が
立ち上がった。
カウンターを確認。
さっきの店員さんは
交代したようだ。
「行けるっ!」
怜治はカウンターに
行く。

「ご注文は…?」
人が変わっても
変わらないニコニコの
笑顔で店員さんは
対応する。今度は
ちゃんとした女性だ(笑)

「あなたの笑顔を
お持ち帰りです!」

「警察がお望みですか？」

「警察沙汰！！！？」

ななが席から小さく叫ぶ。

「えっ？あの…」

返答に困る怜治！

「店長！！店長！！」

ちよつと変態が

きています！！！！

「変態呼ばわり！！！？」

怜治が言う。

奥から声がある。

「な〜に？みさと、

またワタシの悪口？」

どんだん声が近付く。

「やっぱりみさとは

DSね もっと言って！！」

「「店長、DM！！！？」

「いまでるわ〜」

「「「あれっ!?!」「」

奥から出てきたのは

なんと…金沢茜!!!

しゅん…

啞然とするなな、怜治。

店員が咳く。

「店長、悪口も0円ですか?」

第11話 体育祭が雨で潰れたときのレイターの100の攻めかた

「お前たちいつ!!!」

明日はなんの日だつ!!!」

「『『体育祭!!!』』」

慎治の問いかけに

教室が呼応する。

「絶対に負けられない

試合がそこにはあるんです」

「サッカーの解説者かつ!」

クラスが怜治にツッコむ。

教壇に立つ慎治怜治が

みんなを鼓舞する。

「優勝クラスにはなんと

校長から豪華商品が

貰えるつ!!!」

慎治が叫ぶ。怜治が続け

「学年なんて気にするな!!!」

「『優勝するのはつ!?!』」

「『『1-3』』」

クラスが一丸となる。

教壇に学級委員の

金沢茜が上ってくる。

「団結式はそのぐらいに。

みんなの出場種目を

決めるから、そこどいて」

「「やっぱりさだな」」

「どけっ!!」」

そそくさと二人は
教壇から降りた。

「では、出場したい
種目のときに拳手を
してください。

まずは……」

出場種目が決まると

また二人が教壇に立つ。

みんなもざわつく。

「「明日は勝つぞっ!!」」

「「「おおっ————!!」」」

ピンポンパンポーン…
校内放送だ。

「今日の体育祭は
突然の雨のため
中止になりました。

もう一度放送します…」

1 - 3 は静寂に包まれた。
テンションはがた落ち。

昨日の盛り上がりから

一転、小さな焚き火に

消防隊の巨大ホースの

超高压放水をぶちまけた

感じにビチャビチャだ。

「マジかよ…」

ブツブツと呟く。

「朝晴れてたから、

授業の用意してねえよ」

「私も」「俺も」「アタイも」

「下手したら、

生徒全員持つてきて

ないぜ」

「どうするんだろ？」

「授業とかマジ萎えるう〜」

「いや、ないだろ…」

「わかんないよ〜」

ピンポンパンポーン。

引き続き校内放送だ。

「全生徒に連絡します。

全員、体操着に着替え、

体育館に集合して下さい。

緊急集会を行います」

クラスがざわついたが

谷山先生がきて

「お前ら、早く着替えて

体育館に行けえー！
と言っているのでみんなが
体育館に向かった。

「校長先生から今日の
予定説明！！校長先生、
宜しく願います」

私達の学校、

横須賀総合学院高等学校
校長、軽井沢やすおは
少しポツチャリとして
白髪、メガネとこれぞ
校長！！といった感じで
ある。ちよっぴり

おかしいが…。

「きをつけ、礼」

ステージでポツチャリの
赤ジャージ姿の

おじさんがしゃべりだす

「えゝ残念ながら

急な雨で体育祭は
中止になりました。

朝晴れてたから、

みなさん、授業の用意を
していません。

先生方と緊急に会議を
行い、私がある提案を

しました。

それは……」

体育館がシーンとなる。

「カバディしよ」

「何それっ!!?」

私だけじゃなく、

他の生徒も困った顔をしている。

先生方も苦笑いだ。

（完璧に校長の趣味だ）

「説明しよう!!」

横須賀総合学院高等学校

校長、軽井沢やすおは

全国の高等学校の

校長から変なことを

行事としてやりたがる

ことで恐れられる

変人校長なのだっ!!」

「カバディ、知ってる人、
拳手〜」

私はキョロキョロと
周りを見た。

「知ってる人
なんているわけ…
あつた!!」

怜治が天をつくように

真っ直ぐ手を挙げている

「ほっほ、君名前は？」

校長がステージから

怜治をみる。

「渡瀬怜治です」

「カバディ歴は？」

「三年です」

二人がニヤリとする。

（何？そのどや顔！？

気持ち悪っ!!）

「いいだろう：充分だ」

校長が手招きする。

怜治がステージに
上がる。

「じゃあ、みんなに
ルール説明」

「アイアイサー！

やすおくん」

「何故に親しげ!？」

カバディの ルール説明

(みんなもやってみよう)

- ・人数は一チーム
10～12人でそのうちの
7名がコートに入ります

・コートの広さは
13×10m(女子は11×8)

- ・まずは先攻のチームは
一名攻撃する人、
レイダーを選びます。

- ・レイダーは相手コートに
入ったら

「カバディカバディ…」
と言い続けます(このことをキャンントという)息継ぎは出来ません

- ・息が続くまで
守備側のプレイヤー
アンティに触れようと
します

- ・そして、自陣コートに
戻ります。触れた人数だけ
点数が入ります、が

アンティは戻らせまいと
キャッチング

(捕まえる) ようとします

キャッチングしたら

アンティ側に1点が
入ります

・キャッチングされた

レイダーはコートに

出されませんが、味方がポイントを取ることによって

復帰できます

・以上のことを

男子は20分ハーフ

女子は15分ハーフで

行い、最終的に点数が

高かったチームの勝利

「というスポーツです。

理解しました?」

「わからんわっ!!」

普通に無理ですね。

「理解したようですね」

「聞いてた!？」

「ムリでしょ!!」

「校長!!つまりは

相手を誘いながら
タッチされずに
自陣コートの中まで
誘導し、キヤント切れを
狙うか、みんなで
囲んでキャッシングを
狙うという方法が
有効なわけですね!!」
「慎治わかったの!？」
「嘘でしょ!!」
「そのとおりっ!!」
「さすがだな、慎治」
「まあな」
三人がニアリと
笑う。
「どや顔やめっ!!」
ニアリの二つて
断定の助動詞の
(なり)の連用形だねWW

「とっというわけで……」
体育館にラインが
敷かれて2チームが

中央に集まった。

「これから2 - 2 V S 1 - 3の
試合を始めます!!」

「さあ、始めました

全学年豪華商品争奪

カバディ大会です。

放送席放送席。

実況はワタクシ

山崎朝華が担当します。

解説者は我らが

前年度ダジャリスト

チャンピオン二階堂君が

きてくれています。

二階堂君、この試合、

どういった感じに

なると思いますか？」

二階堂君は両肘を

長テーブルにつき

組んだ両手に顎をのせ

「まず、僕は三人に

注目したい」

「と、言いますと？」

「1 - 3のダジャリスト、

横河慎治、渡瀬怜治、

そして狭山ななだ。

ぶつちやけカバディは

分からないがその

巨大なダジャリストの

オーラで何かしら

奇跡を起こしそうだ」

「すべてはダジャレ、
ということですか？」

「まあ、そういうことだ」

「「「違うだろ!!」「」」

「試合始め！先攻、

1 - 3!! レイダーは前に!!」

みんなが話し合う。

問題は一つ。

「誰が行くか？」

すると怜治が

「俺がいく!!」

みんなが怜治をみる。

「みんなは初心者だが

俺はやったことがある！

みんなのために俺の

カバディ魂見せてやる!!

俺の背中について来い!!」

おおっ!!と湧き上がる。

ずいっと怜治が前に

出て行く。

ライン手前で深呼吸…

一歩踏み出す……!

「カバディカバディ…」

踏み出した瞬間に

キャントを始めた。

そして刹那のうちに

敵コート縦横無尽！！

「7ポイント！！」

審判が叫ぶ。

「おおお〜！！！！」

「なっなんと渡瀬選手、

一瞬の刹那のうちに

全プレイヤーに触り、

7ポイント先取ですっ！

二階堂君、どうでしたか？」

「いまのは、

shootingstarタッチだな」

「何それっ!？」

「流れ星が流れるような

速さでアンティを

タッチするレイダーの

基本にして最高の

攻めかただ」

「そのままですね！！」

「まあな」

「次は2-2の攻撃です」

2-2のレイダーが

前に出てくる。

「彼はどうですか？」

「彼は多分、ラグビー部だ

本場の人といっても

過言ではない。
彼をどう止めるか
見物だな」

筋骨隆々の坊主頭の
ラグビー部が深呼吸。

「さあ、キャントを
始めました。突っ込んで
いきますっ！！1-3が

逃げています！！

深く切り込みますっ！

5人タッチし、

戻り…おおっと！！！」

ラグビー部に周りこみ
戻ろうとしたところを
慎治が背負い投げした。

「これは痛い！！

受け身がきれいに

決まりましたが

試合的には無得点です。

2-2！！」

「さっきのは

背負い投げですね」

「見れば誰でも

分かりますよ！！」

「さすが、オーラが

違いますね」

「オーラは関係ない！

カバディは格闘技とも

言われることが

ありますがこのことを
いうのでしょうか!?

1 - 3に1ポイント追加!..!

「カバディはちなみに
インドと

バン格拉デシユの

国技です」

「えっ?何で

知っているんですか、

二階堂君?」

「W i k i p e d i a」

「..」

「さあ、次は1 - 3の
攻撃ですつ!!」

誰がレイダーに
なるのでしょうか?」

「個人的には狭山さんが
みたいですね。

今年度チャンピオンが

どういった攻めを

するか、非常に

楽しみです」

「ななつ、頑張れっ！」

「私っ!?!いやいや、

ヤダよ。ヤダ!！」

「行くぞ、ななつ!！」

「ちよっ!押すな!！」

慎治怜治がライン

ギリギリまで押す。

「行くぞ〜せ〜の」

「まっつて…」

一步ラインを超えて
しまった。

「えっえ、カバディカバディ」

「おおっ、皆より

キャン트가1オクターブ

高いですねWWW」

「これは1オクターブ

上げて相手を油断させる

超高等技術

オクキャントです。

ご覧下さい。皆が

面白すぎて笑っていて

逃げることを忘れて

います!！」

「なんと狭山選手!！」

5人タッチで

5ポイント追加です!！」

こうして試合は
続き…

慎治、怜治、ななの
活躍により

「試合終了ー！！」

1 - 3 の勝利！！！！」

「「「やったあ〜」」」

「カバディ、意外と

楽しいっ！！！！」

こうしてカバディに
ななははまった。

「ふふっ… 1 - 3 か。

なかなか面白そうだ」

「しかし、我々

四大スポーツクラスを

相手にどうなるかな？」

「やつらのブロックは

ぬるいな。ホントの

戦場はこのブロックだな」

「どこが頂点に立つか、
楽しみだ！！」

四大スポーツクラス
初戦敗退（爆）

破竹の勢いで
ななのクラスは
勝ち続けて…

「決勝戦、おそらく
最後の攻撃でしょう。
1 - 3の作戦タイムです」

コートの中では
作戦会議が…
怜治が

「どうする？3ポイント差…
誰が行く？」

「俺は厳しい…
さっきのレイダーで
膝の爆弾が疼いちゃった」

「仕方ない…俺が…」
「ちよつと待つて」
カバディに目覚めた
ななが怜治を遮る。

「怜治、あなたの

shootingstarタッチは

もう見極められている。

いったところで

キヤッチングされる

のが目に見えている。

もしくはキヤント切れを

狙われて時間切れ…」

「じゃあ、どうしると?」

ななは自分を指差し、

「私がいく!」

「大丈夫か?

オクキヤントは

警戒されてるぞ」

「新技があるの」

「リスクが高すぎる

やめ…」

慎治が止めようと

すると怜治が

「いや、現状、

いけるのはななだけ…

信じてみよう」

他のメンバーも

頷く。

「ありがとう!

みんなっ!」

ライン手前まで

たどり着く。

緊張で胸が高鳴る。

深呼吸する。

「カバディカバディ…」

「さあ、最後の攻撃！！
なな選手、

オクキヤーントを

開始する…

おおっとこれはあゝ！！！」

ななは怜治の

shootingstarタッチと

オクキヤーントを

合体させながらも、

キヤッチングを

されないように

敵一人一人を

背負い投げしていく！

かなりの早技だっ！

「すごい！すごいぞ！

なんとということ！！

なんという技！！！」

朝華が感嘆する。

「さしずめ

オクキヤーント

shootingstar

背負い投げレイダー

といったところですか。

お見事！さすがは

チャンピオンだ！！！」

ビーーーーー!!

「ここで試合終了!!」

優勝は1 - 3ですっ!!」

「「「やったあー!!!!」」」

「優勝1 - 3!!」

ステージで校長から

賞状が慎治怜治に

渡された。

「優勝した1 - 3には…」

クラスがざわめく。

「校長の肩叩き券」

「「「父の日の子供かっ！！！」」」

はい、うちの学校の

校長はしょくもなっ！！

第12話 大きな杉の木ノ下で

「じゃあ、俺が女」

「了解。俺が男やる」

男子二人が大きな杉の木の下でこそこそと話している。

周りには誰もいない。

二人つきりである。

校舎裏に位置しているが

なにぶん、杉が大きく

枝があちこちながくのびているから

廊下の窓から見ようと

こころみても

ちよつとやそつとじゃ

見えないのである。

「なんか本当じゃないけど

緊張するな……」

「何恥ずかしがってるんだよ!!」

「いや、されたことは

あるけど、したことは

ないからなあ」

「いいからさつさと

しようぜ。みんなが

できちまうだろ……」

「わかったよ……じゃあ……」

いうぞ…」

「ああ」

二人は黙りこくった。

しかしその沈黙は

片方の意外な言葉により

破られたのだった。

「初めて見たときから

好きでした。付き合っ

て

下さい」

するともう片方は。

「俺も…好きだった」

男二人が見つめ合った。

しかし何も起こらない。

しかし何かが、

得体の知れない何かが

外見では判断できない

何かが二人を貫いた。

空の青さが眩しかった。

それから数十分後、

W J Cの部室には

一人きりで佇む

美少女が…

後ろ姿は物悲しげに
佇む美少女だったが
実際は違った。

顔は険しく、テーブルを
指でトントンと
叩いている。

「ったくっ、

呼び出した方が
来ないなんて

信じらんない！」

WJCの一員、狭山なな。
今日もいつも通りに
部室に集合。

もちろん、あの二人から
同じメールかつ

同時にくる。

いつものことだ。

一つをのぞいては。

「いつもなら二人いるのに
いないなんて…

また私に何かしようと
してるのかあ？」

そう…あのスーパー

問題児達がないのだ。

ガラガラ。

「おいっ！慎治怜治！！

おそ、あ、香奈っ」

「あれ？ななちゃん、

今日は一人？」

女子サッカー部

キャプテンの寺島香奈が入ってきた。

「違うよお。慎治怜治が

呼び出しといて来ないの」

頬を膨らまし、

香奈に訴える。

香奈も少し驚いた顔をする。

「あの二人がななを

呼び出しといて

遅れるなんて珍しい」

「そうなんだよ。

いつもならいるけど

今日は来てないの……」

ななは端により

香奈にソファアを勧めた。

香奈はソファアに

座った。

「私ならあの伝説の

鬼会長を待たせたりは

しないね。怖さのあまり」

「香奈ちゃん!!」

ななは少し怒った。

「昔の話はしないで!!」

「ハイハイ、昔って

言っても数ヶ月前の話でしょ」

反論しようとななの

開きかけた口は
ドアが開く音に
閉じることを余儀なく
させられた。

ドアには慎治怜治が…

「おっそ、い…

何…やってんの？」

慎治怜治はお互いに
肩を寄せ合い、まるで
できたてアツアツの
恋人のようにひつついて
いる。

怜治が慎治の肩に

頭をよりかけている。

ななは胸くそ悪くなった。

吐く真似をした。

「え…あの慎治君？

怜治…君？二人とも

何かあったのそんなに

ひつついて…」

香奈が何故か慌てた感じ
焦った、戸惑った感じで
二人に聞いた。

「きもいよ。二人とも」

さっさと離れなよ」

ななが厳しく言った。

今度は香奈が吐く真似を
した。

ここで初めて

二人が動きだした。

ななと香奈をどけて
ソファーにすわるや
いなや、イチヤイチャ
しでした。

「怜治：もう君を
離さない」

「嬉しい！！慎治！！」

二人は熱く抱擁しあう。

「なにこれ：」

なな、香奈が二人して
目の前で起こっている
奇妙な男同士の行動に
指をさして言った。

「さあ」

また、ハモる。

困惑する二人をよそに
男どもはまだ続ける。

「俺達は生まれた瞬間から
小指が赤い紅シヨウガで
繋がっていたんだ」

「紅シヨウガ！？」

普通に糸でいいだろ！！
あんた達は焼きそばか！
なながツッコむ。

「嬉しい！！やっぱり

紅シヨウガがあったのね」

また怜治は慎治の
胸に飛び込む。

「紅シヨウガでいいの？
小指臭くならない？」
香奈が的確に言った。

イチャイチャが続く。

だいたい慎治が

コーヒーに砂糖を

山盛り5杯ぐらい

いれたぐらい甘い言葉を

machine gunのように

呟き、怜治がそれに

感嘆の辞をのべる。

(非常に非常にさむけが)

「お茶でも…飲む？」

ななが気まずそうに

聞く。何故か、ななと

香奈は今まで二人きり

だった恋人達の部屋に

間違っに入ってしまった

ような感覚に捕らわれていた。

早くもこんな部屋から

出て行きたいが

二人がどう考えても

おかしいので

無視出来なかった。

ななの問いかけが

というよりも慎治怜治の

視界にはななと香奈は

いないようだ。

「.....」

((気まずっ!!))
只今のシンクロ率は
400% (爆笑)

沈黙が続く (ななと香奈)
イチャイチャが続く

(慎治 怜治の)
ななが耐えかねて
お茶を淹れた。

慎治 怜治のぶんも
テーブルに置いた。
すると怜治が

「 ねえ、あれしよう
(あれって...?)

「 あれか！よしわかった」
(わかったのかい！)

慎治がゴソゴソと
制服の内ポケットを
探っている。

何かを探している。
あちこち探した結果、
何かに触れて

> あっ、あつたく
みたいな顔をした。

(何取り出すんだろ?)

「これだろっ!!!」

(ストロー?)

二人が疑問を感じる。

「それぞれ

じゃあやろっ!」

(何を?)

チュー

二本のストローで一杯の

お茶を飲む!!!

「やめんかつ!!!

あんた達は華に

群がる蝶々かつ!!!」

止めない二人。

すると携帯の着信音。

「もしもし？」
慎治の携帯だ。
「そうか、うん。
ああ、君か。わかった。
では、またあとで」
慎治が電話をキルト
スグニ怜治が
「さっきの誰？」
ときつめの口調で
聞いた。
「いや、友達だけど…」
「嘘！！私以外の男でしょ」
「ちっ…、ちがう！！」
「何！？その間は！！？」
（こんな女の子いたら
さぞ、面倒だろうな）
ななと香奈が心で呟く。
「ホントだっ！！」
友達だって！！」
「そういつて…」
浮気でしょ！！」
ソファーから怜治が
立ち上がる。
「もう、いいっ！！」
私、帰るっ！！」
ドアを開けて
出て行くこうとする怜治。
その腕を掴む慎治。
「離してっ！！」
「めちやくちやに

振りほどこうとする

怜治。

すると、慎治が

思い切り抱きしめる。

「君しかいないんだ。

怜治！！結婚しよう」

「はっ！？」

ドアの近くには

何故か岸本慎哉が…

「アニキ達って…」

アニキ達って…」

後ずさりする慎哉。

「慎哉君、ちよっと

待って！！」

誤解したと思い

ななが慎哉を呼び止める。

「欠根って

根がなかつたんですね~~~~~！！！！！！」

「何それっ！！！！？」

叫びながら走り去る

慎哉の背中に突っ込んだ。

また仲直り？した

慎治怜治がソファで

イチャイチャして

話してる。

さすがにそろそろ

トイレに行つて

吐きたいなと思ひ始めた

ななと香奈は

二人に話しかけた。

何でこうなったかを
知るためだ。

「二人はさっきまで
どこにいたの？」

ななが聞くと

初めて二人が

反応した。

「校舎裏で愛を
語っていた」

どうも二人は

自分達がどれだけ
アツアツかを

言いたいらしい。

「そこで慎治が…」

「いや怜治も…」

とか話している。

「わかった!!」

香奈がいきなり

手をたたいた。

「どうしたの？」

香奈がななを見て

「校舎裏の杉の木、

知ってる？」

（確かにあるはあるが、
それが関係あるのかな）

「知ってるけど、
何で？」

「この学校の七不思議の
一つで校舎裏の杉の
木の下で告白すると
絶対叶うってというのが
あるんだよ!!」

「噂は知ってるけど
なんで二人が？」

男同士だよ？」

「二人のことだから
男同士でもなるか？
って思ってたんだよ」

「まあ〜た

しよ〜もないことを…」
二人ならありえるなど
ななは思った。

「直す方法はあるの？」

「その木の下で

違う女の子に殴って

もらえばいいらしいよ」

「よしっ!!」

行こう」

二人を引きずり出し
木の下に。

ななは二人を殴った。
ほぼどうじに

「イテテテ」

「世話焼けるな！たく！
行くよ！！」

慎治 怜治はキョトンと
している。

「どうしたの？
部室戻るよ？」

二人はななを見て

「私は誰？ここはどこ？」

「記憶喪失っ！？」

香奈は苦笑い。

「強く殴りすぎたんじゃない？」

第13話 結局、何部？

トントン！

ドアをノックする音。

「ハ イ」

部屋の主達が答えた。

「失礼しやうす」

明るく元気な声で

訪問者が入ってきた。

「おお、慎哉」

「こんちわす」

慎哉は一礼した。

「慎哉君、座って座って」

ななが来客用ソファを

勧めた。

慎哉は片手に持った

ビニール袋をななに

差し出して

「これお茶菓子っす」

「いつもありがとう！！」

すぐお茶出すわね」

ななは準備をしたらした。

「怜治、新しいレイダーの

攻め方を考えたから

明日あたりやろうぜ」

「了解」

（レイダ ……？）

「俺もアンテイの

NEWキャンント妨害方法を
試してみたい」

「そうか！じゃあ勝負だ」

(アンテイ？キャンント？)

慎哉には聞いたことの
ない単語の連呼だった。

「バリトウボールの新商品が
でたらしいぜ」

「あとで買ってきて

フィギュアを増やすか」

コトン。

なながテーブルに

お茶を置く。

「慎治、慎哉君。お茶」

「おいす」

「あざす」

なな、慎治、慎哉が

同時にお茶を飲む。

ズズズ。

(……………)

ななが湯のみを両手を持ち

二人を見て聞いた。

「今日はどんな活動？」

慎治「うん…」

怜治「予定なし」

「じゃあ、今日は

サッカーしようか」

「昨日もしたじゃん」

「そうだった？」

「一昨日もやった」

「忘れんなよ」

「ゴメンゴメン」

(……………)

ここで慎哉が手を
挙げた。

「……うん？どうした？」

三人が不思議そうに
慎哉を揃って見る。

「一つ聞いて良いですか？」

「……どうぞ」「」

「皆さんの部活って、
一体何をする部活なんすか？」

「……」「」

三人は顔を見合わせる。

「いつも、活動は

してんすけど、何を

目標にしてるかが

全然わかんねす」

慎哉がズバズバと

言ってきた。

ななの心にささる。

顔が少しひきつる。

反対に慎治怜治は

普通の顔だった。

慎治が

「え〜と、そりゃあ

怜治が

「イタズラだろWWW」

「イタズラっ!？」

「違う違う違う!!」

「ななが直ぐに訂正。」

「みんなの悩みや依頼を

ストレス?を解決する部活」

「そうなんすか?」

「そうそうそう」

「ななが必死に頷く。」

「「ちが…」」

「違くないっ!!」

「ななが遮る。」

「それにしても依頼が

きてねんすね?」

「うっ…それは…」

するとまたノックの音。

「あっ!依頼かな」

ガラガラ。

「すみません。」

落とし物しちやっただんですけど」

「どうぞどうぞ」

「ななが慎哉の隣に依頼者を

座らせた。」

「何を無くされたんですか?」

すると依頼者は

「昆布を」

「「「「昆布っ?!?!?」「」「」

「あの私、明日

大会があつて昆布が

絶対に必要なんですよ」

ななが落ち着いた感じで

納得するように頷いた。

「クツキング部があゝ、

明日何を作るんですか？」

すると女子生徒は

「いえ：私はこん部です」

「「「こん部!?!?!」

ななと慎哉が驚く。

しかし、慎治怜治は

またもや普通の表情。

不思議に思つたななは

二人に聞いた。

「そんな部活あるの

知つてた？」

「「「うん」「」

「ホントに!?!?!」

慎治怜治の即答に

驚きが隠せない。

怜治が

「ぶつちやけ結構

入部しようかと二人で

悩んでた」

（下手したら私も入部

するところだったてこと…）

慎治怜治の子守役の

ななだからあり得る。

こっちで良かったと

少しだけ思ったなな

だった。

「どういう部なんですか？」

慎哉が聞いた。

誰も答えない。

「あの…」

依頼者の肩を叩く。

「はっ、何ですか？」

「え〜と…アナタの…」

「私の名前は反歩やちよ

（たんぶやちよ）です」

「反歩さん、アナタの部活は

どういう部活何ですか？」

「え〜とですね、

部活の幹部が昆布を

おんぶして音符を

よみながら昆布の

乾物を早くつくる

勝負をする部活です」

「…」

(やたらとぶが多いな)
慎哉は思った。ななは

(どんな部活だよ)と
ツッコんでた。

「で、落とした場所は？」
慎治が聞いた。

(昆布だから冷蔵庫でしょ)
ななと慎哉は思った。

「いつも机のわきに
引っ掛けていたんですけど」

(「ほったらかし!」?)
「部室に持って行ったと
思ったらなくて…」

慎治・怜治は立ち上がり

「じゃあ探しに行くか」
慎哉も立ち上がった。

「じゃあ、俺はこれで…」
「「うん? お前も来るんだよ」」

「え? 俺がいたらお邪魔に
なるんじゃない」

「まあまあ気にしないで
一緒に探しに行こう」

ななが慎哉に優しく言った。

「分かりました」

5人で教室に行くことに

5人は教室についた。

「反歩さんの席は？」

慎治が聞いた。

反歩は指を差した。

「そこです」

ちようど教室の中央。

可愛い手提げ袋が

机のわきに掛けてある。

「この中は？」

ななが聞いた。

「その中は教科書とか、

お弁当とか入ってます」

慎哉が冗談で

「お弁当の中は？」

と聞いた。すると

「時々、おかずとして

入ってますけど、

部活用があるんで…」

「部活用？」

「部活用は結構高くて、

焼津産のしか使いません」

（違いがあるのかい…）

「音のなりと、乾きが

全然違うんですよ」

ななの思考をよんだかの

ように反歩が話す。

「中身をもても？」

と怜治が指差し言う。

「どうぞ」

怜治が逆さまにして

手荒く中身を出す。

「怜治、もうちょっと
優しくっ!!！」

なながたしなめる。

中身が机に出される。

いくつかが机から

はずれて落ちてしまった。

「ゴメン」

「だから言ったのに」

「いえ、大丈夫です」

慎哉と反歩が拾おうと

する。予想以上に散らばって

しまった。

なにやら黒いものが多い。

「これは…」

ワカメだった。

「たまにワカメも

使うんです」

理解に苦しむ表情を

慎哉が浮かべていたのを

見て説明した。

「そうなんすか」

又ル又ル感が半端では

ない…。

しかも生臭さが教室に

広がった。

それから一時間

5人は探したが

なかなか見つからない。

ついには反歩は

泣き目になってしまった。

明日は結構大事な大会

らしい。

三年生の先輩方の

引退試合らしく良い

引退試合にしたらしい。

「今日、昆布なかつたら

わたし、わたし…」

「大丈夫、俺達が

絶対見つけてやるよ!!」

慎治怜治が優しく

笑顔で言う。

すると、反歩は

すこし落ち着いて、

少し笑って

「ありがとうございます」

(やっぱりアニキ達は

優しい人達だな)

と思っっていると…

どっしやーん!!!

「いてっく!!!」

慎哉は反歩の机を

道連れにし、転んだ。

「拾い損ねたワカメ!!」

をどうやら踏んで転んだらしい。

「あっ!!!」

反歩が叫んだ。

机から昆布がちらりと
見えている。

「あつた!!！」

「机の中か…」

灯台下暗しってやつだな
何故か怜治がうまいこと
言った。

「良かったあ…」

慎哉さん、でしたっけ？
ありがとうございます」

「俺ですか？」

「はい、慎哉さんが
居なかつたら

見つからなかつたです」

「よくやったぞ慎哉」
二人が慎哉を誉めた。

反歩はにこりと

今日一番の笑顔を
見せた。

（だからか…）

WJＣの部室に戻る。

ななが慎哉に聞いた。

「どつという部活だかわかった？」

慎哉は深く頷いた。

「はい……」

慎治怜治が急に

話に入ってきた。

「みんなに笑顔を

与える……そんな部活、

名前は……」

よろこんぶ」

「昆布だけにですか？」

4人の笑いが部室に
広がった。

第14話 喧嘩

みなさん、こんにちは！！

WJの狭山ななです。

いつもこのしょくもない

部活の活動記録を

読んでいただき

ありがとうございます。

えっ？最終話なのかって？

もちろん、違いますよ

今日はみなさんに

まともな（いつもまとも

ではないけど）活動は

できなかったので

報告いたします。

では、

何故できなかったか？

説明しましょう！！

帰りのSHRを終えて、

私は掃除当番なので

掃除をしにいきました。

しばらくして、私が

巷では「ジャイアント

黒板消し」とよばれる

もしくは略されて

「ジャイコ」とよばれる
黒板消しをクリーナーに
かけていると、WJの
顧問谷山先生が慌てて
私のほうに来ます。

口早に私に

「ついてこい」と言う
きびすを返して

廊下を進んで行きます。

私は何だろうと思い、

友達の朝華にジャイコを
渡して谷山先生に
ついていきました。

谷山先生が足を

止めた場所はWJの部屋。

中からは大声が。

状況を私は察しました。

が、その時はジャイコが
あんなことに使われる
なんて、まだ知りませんでした。

ジャイコはさておき、

中はたいして危機的状況

ではないと私の長年の

勘が教えてくれました。

「慎治怜治が喧嘩してる。

止めたほうが良いから

止めてきてくれ」

何故か、焦ったように

谷山先生が言うのが

少し可笑しくて笑った。

「なんで笑う？」

不思議に思った先生は
眉をひそめて私を
見ました。

「先生、大丈夫ですよ。
放っておけば。」

年に一回ぐらい二人で
ああやって喧嘩を
するんです」

「そうなのか。お前が
言うならそうなんだが
あの二人が喧嘩なんて
考えたことなかったから
ちよつと慌てたんだ」

「そうですか。大丈夫。
どうせしょくもない
理由で喧嘩してますよ」

私は部室のドアを開けた
やはり、喧嘩の真つ只中
「俺だ!!」

「いや！俺だっ！」

「いやいや！俺だっ！」

「いやいやいや！俺だ！」

「いやいやいやいや…」

「ハイハイ、

何やってるの？」

二人の間に割って入る。
「「なな」」

谷山先生も入ってきた。

「聞いてくれよ。」

「こいつが……」

慎治怜治のそれぞれが相手に指差して言う。

「どうせ同じことを」

話すから一人でいいよ。

怜治が話して「

キツパリと私が言う」と

怜治が話しだした。

「話せば、長くなるが……」

二人が帰りのSHRを終えて

廊下を歩いていると

二人の女子が向かいから来たらしい。

二人は慎治怜治の

ファンクラブの会員で

(慎治怜治はモテる)

二人に話しかけてきた。

「きゃ〜生の慎治よお〜!!」(キー高め)

「こっちは生怜治〜!!」(超音波レベル)

とか、何か言われて

「乾燥してたら

どうなってたんだ?」「

とか、普通に聞いたら

女子二人は抱腹絶倒。

二人の笑いは慎治怜治の

両耳をほぼ破壊しかけた
が、ギリギリ壊れずに
済んだ。

落ち着いた女子二人は
慎治怜治に聞いた。

「どっちのほう面白いの？」

「俺だろ」「」

二人は同時に自分を
指差し言った。

もう一人の女子が

「お菓子一つしかないけど
あげる！！どっちが食べる？」

「俺だろ！！」「」

二人は睨み合った。

「とうわけだ」

「しよゝもない」「」

予想した通りだった。

谷山先生もため息もの。

「で、どっちのほうか

面白い？どっちがお菓子を
食べるべきか？」

沈黙を守っていた慎治が
破り、たたみかけてきた
「ふつ〜…にお菓子は
半分こにしなさい」

私がいとうと二人が

そのお菓子を指差す。

あめ玉だった。

「わけられないね」

谷山先生がちやかす。

「じゃあ、じゃんけん」

「何回もやったけど

あいこが100回続いたから
止めた」

怜治がふてくされる。

(何そのいらない奇跡)

「じゃあ、私が食べる」

冗談で言ったのだが

「「ななならいいか」」

と簡単に諦めた。

((あいこ100回の執念は
どこいった!?!?))

口には出さない優しい

私と谷山先生。

一つ目の喧嘩はクリア!

本題はここからだった。

「あめ玉はいいけど

どっちが面白いかは

まだ決まってない!」

怜治が叫ぶ。

「そつだ!!まだだ!」

睨み合いがまた始まる。

「慎治!!!」「何だつ!!!?」

「このまま言い合いを

続けても埒があかない」

「そつだなつ!!!なら

どうするつ!?!」

「提案があるつ!!!」

面白さを競う試合を

三試合して先に二勝を

したほう面白い!!!

で、どうだ!!!」

「シンプルでいいなつ!

のつたあ!!!!!!」

「では、始めよう…」

「おお!!!」

二人は部屋から出て行く

谷山先生が頭をかく。

「アホだな…あいつら」

「今気づいたんですか?」

「最初からうすうすは…

だけど今日確信した。

しかし、扱いがうまいな狭山」

「誉められても

嬉しくないです…」

顔に出たのか、先生は

「大変そつだな…」

あの二人のお守りは。

あとでラーメン奢るよ」

そうなんです…

大変なんですよ、

でかい子供のお守りは…

部室から出て行った

二人を追うと何故か

ゲームセンターに。

どうやら、一回戦は

ここで行われるらしい。

慎治怜治はあるゲーム機

で立ち止まった。

「ラウンド？は俺が

決めたぜ！！」

慎治が私達に説明を

始めた。

ラウンド？

「最強のシッコミ」

パンチングマシンで

より高いスコアを

出したほうの勝ち

「以上だ！！まずは怜治！

公正なジャッジを頼むぜ

二人とも！！！」

なんか勢いで私達は

審判にされた。

「仕方ねえくな。一応は

顧問だからな」

ボヤク先生をよそに

怜治は百円を投入する。

そして、付属してある

グローブを着けると

素振りを始めた。

ゲーム機が何かしら

説明をしている。

説明が終わると

ターゲットが起き上がる

「行くぜっ！！」

怜治がシャドーボクシングを

やめて、気合いを入れる

構える…

ピクリと動くと

全体重を拳にのせて

ターゲットを殴る。

腕のうねりが聞こえた。

ゲーム機がスコアを

計算し始める。

「100kgか…なかなかだな」

第？ラウンドを行うため
場所を移動した。

「次は俺が決める！！」

次はこれだっ！！」

部室に戻ってきたら

テーブルに何か白い布で

覆われたものがあつた。

怜治がそれを指差して

「次の勝負は……」

白い布を取り払う。

「ベীগオマだっ！！！！」

「面白さ関係ないよね！！？」

第？ラウンド

「最強のベীগオマ回し」

タイトルの時点で

面白さ関係ないが

いつ面白いベীগオマ芸が

思いつくか分からない！

ここでベীগオマを

回せるようになりましょう

「最後の文、完璧に

「昭和の遊び教室」の

講師の人だよな!?!」

「早速行くぞつ! 慎治!」

「おお!!」

「シカト!?!」

あまりにも地味な
戦いなので省略を
させていただきます
結果は普通に怜治が
勝ちました

「なかなかやるな……」

「そつちこそ」

二人はベーゴマを
持ちながらお互いを
称えあつ。

しかし、その画^えは

果てしなく高校生とは
かけ離れたものでした。
つまり、ダサかった(笑)

「次が最後だ! 最後は……」

最後は移動しなかった。
最後の勝負は

第？ラウンド

最終決戦！！一発芸

それぞれが一発芸を
行い、審判が最後に
審査し、勝敗を決める。

谷山先生がニヤリと
笑った。

「ちょっと待て、
それなら……」

なにやらぶつぶつ言って
電話をかけた。

数分後、WJＣのドアが
開いた。

「お呼びでしょうか？」

谷山先生

「おお、来たな！座れ」
慎治怜治は凍りついた。

「谷田さんっ！！？」

説明しよう！！

谷田さんとは第四話の
ダジャレコンテストに

おいて、数々のダジャリストに
酷評と精神的ダメージを

与えた伝説の審査員で

ある。彼女の厳しい意見は
ダジャリストに健全な精神、

「あ、こんなダジャレ
ばっか言ってる何が

面白いと思っていたんだろう？俺（もしくは私）」

を呼び覚ますのである

すなわち、恥ずかしさの

どん底に突き落とすのである

「何かご用ですか？」

「いや、今からこの二人が

一発芸するからよ。」

評価してやれ」

あからさまに不機嫌な

顔をした谷田さんだったが

「わかりました」

と静かに言った。

「この間ダジャレコンテスト

も拝見しましたよね？」

谷田さんが慎治怜治に

「……」

「あの、い、以上です」

「次」

凍りついた声の谷田さん

怜治が慎治と同じように

恥ずかしそうに前に

出た。

何故か、大きな赤い

カラーコーンを持つ。

(工事現場においてあるやつ)

するとカラーコーンを

逆さまにして、

裏の丸い穴に頭を

突っ込む…

「アリクイ……」

くぐもつた声が

プラスチックを通し

聞こえた。

「どれも絶望的に

つまらないですね……」
そう言うと谷田さんは
ソファーから立ち上がり
部室から出ていった。
「「「「……「「「「

沈んだ空気が
部室を包む。

「ごめんな、怜治」

「ごめんな、慎治」

「二人とも面白くない」

二人が出した結論。

「仲良く面白くなろう」

二人が握手した。

「……ところで先生、
なんで部室に？」

だいぶさかのぼった
ことを先生に聞いた。

慎治怜治の喧嘩を
見る前に一回来ていたに
違いない。だから

喧嘩を見て私を呼びに
来たのだ。

「あ…あ〜」

質問の意味に気づいたらしい。

少し悩んだが

「依頼だ依頼。ほれ」

「「げっ…」」

依頼内容は漫才…

「「僕達には荷が重いです」」

谷田さんの一言が

完全にトラウマになった

慎治怜治だった…。

第15話 ギャランドゥル

「うゝす、おお!？」

「どうした怜治?おお!」

「ああ、二人とも!!」

やっと来た。依頼が

溜まっているよ」

部室に三人が集まった。

慎治と怜治は顔を

しかめている。

「なんだこの匂い?」

「ごめん、くさかった?」

「いや、いい匂いだけど」

テーブルの上には

小さな炎がゆらゆらと

している。そこには

ピンクのキャンドルが

置いてあった。

「こいつか」

「うん。イチゴの匂い。

いい匂いで安らぐ

でしょう?」

「そうだな」

「ささ、早く依頼を

片付けようよ」

「ラジャー!!」

二時間後…

「よし！！部活終わり〜」

三人が一息つく。

何故か今日は部活が

楽々と進んだ。

「キャンドルっていいな。

何かリラックスする」

慎治が言うのと怜治が賛同

「ああ、俺も今日は

気持ちよく出来た」

「でしょ〜、一週間前に

朝華に勧められて

買ってみたらはまったの

他にも欲しいなと

思ってるんだあ〜」

なながニコニコと

楽しそうに話す。

「キャンドルか…」

慎治がしみじみ言う。

「そういえば、駅の

近くに専門店みたいなの

あったぜ」

「ホント！？行こう！！」

ななが飛び跳ねて

喜ぶ。

「行きますか」

怜治がソファーから

立ち上がり、帰りの

準備を始めた。

「行くか」

三人は部活を出た。

「どういうの買おうかな」

ウキウキしながら

ななが言う。

「珍しいにおいとかが

いいかなあ。でも、

まだスタンダードな

におい買ってないしな

ねえ、まだあ？」

慎治に聞く。

「もう少し先」

三人が歩いていく。

「ついた。この店」

「ギャラントウル、カツラ、毛、キャンドルの専門店」

ヒュー。

木枯らしがふく。

「何…この店？」

「ツツコミどころ

満載だな」

「三種類ある時点で

専門店かどうか

疑わしいな…」

なな 慎治 怜治が

それぞれに感想を述べる

「しかも、まだ1ヶ月も

先なのにサクタいるし…

窓からぶら下がってる」

「出来損ないの泥棒だな」

「しかもちよつと」

すすけているから

煙突から出てきたばっか

だぞ…多分」

「…」

三人が顔を見合う。

「入る？」 怜治が言う。

「一応は…」

三人は未知なる大冒険に
出発した（笑）

「ごめんくださーい」

店内は意外と綺麗だ。

しかし異様な光景が

広がっていた。

「…」

周りを見ればみるほど

謎だらけだった。

「いらつしゃーい」

出てきたのは優しそうな

おじいさんだった。

「ゆっくりしていきな」

「…ハア…」

三人は店内を見始めた。

案外広かった。

20分店内を物色した

結果、三人は一ヶ所に

集まった。

怜治がひそひそと

「なあなあ…カツラの

専門店なのに黄色い

アフロしか売ってないぜ…」

慎治がひそひそ

「毛ってへそ毛しか

ないぜ」

「キャンドルが見当たらない」

落胆した声でななが

話す。怜治がおじいさんに

聞く。

「すいませ〜ん!!」

カツラってアフロしか

ないんですか？」

おじいさんは三人に

近づき優しく話す。

「わしはアフロ一筋

だからのお〜。他の

髪型は気に入らんの

じゃ

（（（アナタの髪型がオールバックなのはどうして？）（（（

三人はこの疑問を

辛うじて押し殺した。

「毛もへそ毛しかないのは

一筋だからですか？」

ほっほっほと笑い

おじいさんが答える。

「わしのギャランドウは

二手に分かれとるよ」

「そ、そうなんですか？」

（（（そんなことは聞いてない…）））

三人は変な汗が出てきた

このおじいさん…

天然ものだあ…

「あの〜キャンドルは

一体どこにあるんです？」

「キャンドルなら

奥にあるから

見てきなさい」

店の奥を指差し

おじいさんが言う。

「ありがとうございます。

慎治 怜治行こう」

「「ラジャー!!」」

「そういえば…」

おじいさんが三人を

止めて話した。

慎治を指差す。

「おぬし、死んだ

ばあさんに似とるのお」

「は、はい。ありがとうございます」

何故かお礼を言って

しまった慎治。

「探しておいで」

三人は奥へ進んだ。

「あつたあつた」

棚に様々な色の

キャンドルが

所狭しと陳列されている

「これは…いちごか」

手持ち無沙汰な

慎治怜治を見てななが

「何かいいやつを

見つけたら私に言つて」

「分かった。探します」

三人でぶらぶらし始めた

数分後…慎治が

「なな、これなんて

どうですか？」

「どれどれ…なにこれ？」

「旅のかほり 京都・奈良」

「修学旅行かつ!!」

「いらないよ!こんなの!

どんな匂いだよ!!」

「なな、これは？」

怜治が茶色の

キャンドルを持って来た

「花のにほひ」

「何か全然花の感じが
ないんだけど…。しかも
花のにほひつて漠然と
し過ぎじゃない？」

「注文が多いな」
「二人が変なのを
持ってきてすぎなの!!」

「これは？」 怜治

「カレイの煮付けの匂い…略して加齢臭」

「うまくないわっ!!!!」
「それは当店の売上
best 500に入るぞ」
「売れてなっ!!」
おじいさんが妙に
勧めてきたが、三人が
一蹴した。

「ワガママなお嬢さんに
こんなのはどうじゃ？」

「あつたかゝい匂い」

「自動販売機!？」

「これもどろじや？」

「つめたくい匂い」

「だから自動販売機なの！？」

店内にななのツツコミが響き渡る。

「あの〜もう帰ります」

「そうかい。またおいで」

結局、一時間ほどいたが何も買わずに店を出て行くこうとすると…

「おお〜う」

新しい客が入ってきた。

なにやらビニール袋を手に持っている。

「「「あれ？」「「「

「よう、お前らか。

どうしたんだ？」

なんとWJの顧客の谷山先生だった。

「先生っ！どうしてここに？」

「あゝそりゃ、
このキャンドルの
匂いづくりの技術提供を
してんだよ」

「おお、来てくれたか」
おじいさんが谷山先生に
近づく。

「お前ら…」

三人を近くに呼び

ぼそぼそと谷山先生が

「校長には言うな…」

「…どうして？」

「首がかかる…」

「保身に必死だなあ」

慎治が呆れてため息を

つく。先生はニヤリとして

「そんなこと言って…」

顧問辞めるよ」

「…すみませんでした」

先生がビニール袋を

おじいさんに手渡す。

「今回はどんな匂いだい？」

「トイレの消 元」

「…パクリ！？」

この店のキャンドルが
全部おかしなのは
こいつのセンスの
せいだと理解した
三人だった…。

「次は牛乳をふいた
ぞうきんの匂いかな
」

第16話 ケータイアクティビティ

「おゝい、慎治、怜治」

ドアを開けながら

入ってきたのは

ななだった。

「なになに？」

ソファーに座りながら

何か一生懸命に

携帯電話の画面を

覗く二人。ななの方を

見ずに生返事をする。

ななもさほど気にせず

話を続ける。

「2-Cの岡田先輩が

何か依頼があるから

あとで来て欲しいって」

「了解」

「言ったよお」

「ちゃんと行ってね」

「ほいほい」

ななは部室の一角にある

事務用の机にむかった。

この机は不要な

職員室にあったものを

谷山先生の好意で

使っているものだ。

専ら、ななが部活の

活動記録を書くために使用する。

ななが活動記録を書き始める。

入室からずつと

慎治と怜治は携帯の

画面とにらめっこ状態。

「……」

響くのは二人が携帯の

ボタンを力チコチ押す

かすかな音だけだ。

「……」

（何この沈黙は？

いと耐え難し、あ、

古文になっちゃった）

そんななの気持ちも

知らずに二人はだんまり

「……ねえ？」

しびれを切らして

ななが口火を切る。

しかし、二人は黙ったまま……

「……ねえ？二人とも何を

そんなにやってんの？」

やっとななの声に

反応する二人。

「ケータイゲームだよ」

慎治がななに画面を見せる。

「なんのゲーム？」

ななが聞く。

「魔王」

怜治が淡々と答える。

「魔王つて、音楽の？」

おとくさん、おとくさんつてやつ？」

「さつきゲームつて

言ったやん。おとくさん

おとくさん!？」

恥ずかしそうに

慌てて弁明するなな。

「ボケよ、ボケ!!」

そんなのも分かんないの」

「…」

怪しげな視線を

ななに送る。

話を変えようとするなな

「なんで急に

ケータイゲームを

するようになったの？」

「そりゃあ…」

「面白いからだよ」

慎治怜治が連携する。

「そういうサイトがあるの？」

「何か今日はグイグイと

くるな、なな。
「怜治、説明頼む」

「ガッテン 俺達が
やっているのは

「楽しい形態ゲーム」

というサイトにある

ゲームだ。このサイトは

幻のゲームサイトと

呼ばれていて、

登録できるのは

ごくわずか…

例えるなら、

玩具が欲しいがために

Mドでお子様ハッピーの

セットを5つ頼む

イタい大人の数と

等しいと言われている」

「なにその例え…」

「その競争率も

さることながら

何故かサイトのゲームは

1日は最高に熱中するが

1日で飽きてしまう

という伝説がある」

うんうんと隣で

慎治が頷いている。

「今回、俺達は

見事登録に成功。

よって伝説の真偽を
確かめている最中だ。
今のところ、楽しすぎて
何にも手がつかない」
「だから、携帯ばつか
見ていたんだ…」
「「そうだ」「」
納得したように
ななは頷く。そして
「私もやりたい」
「「そういうと思って
ななのも登録した」「」
「いつの間に!？」
「「ふっふっふ」「」
こうして三人は
携帯をいじくり始めた。

「最初に占いを
やってみたら？」
慎治が言う。
「ゲームサイトなのに
占いなんてあるの？
やってみたい!!」
「じゃあ、その横の
やつを選択して」
「これ？」
なながボタンを押す。
占いらしい水晶の

ビジュアルが表示される
タイトルは

「やる気なし占い」

「なに…これ？」

困った顔をするなな。

「まあ、とりあえず

やってみな」

能天気な慎治が言う。

スタートボタンを

押してみる。

「あ…めんど〜

占いなんてやりたく…

あ、もう始まってたの？

ようこそ！！占いの館へ」

「グダグダだな！！」

「この館では百種類の

占いが出来ます…」

「百！？すごっ！！」

「…ゴメンナサイ

嘘です。三種類しか

出来ません。テへ」

「嘘なのかい！！」

「では、早速始めましょう

なにを占いますか？

？星座占い

？手相占い

？腹筋占い

選択して下さい」

「？ってなに？

なんでそんな

マッスルな占いが

出来るの？」

「さあ？」

「答えたっ！？」

「で、結局なににすんの？」

「なんで、会話出来るの？

しかも上から視線！？」

「いいから、早く〜」

「分かった、分かった！

じゃあ？で」

ななが選択して

ボタンを押す。

すると、

「システムの準備中のため
まだ出来ません。
しばらくお待ち下さい。
おそらく数年後には
完了します」

「ホントにやる気なっ!!！」

「他にはないの？」
占いが出来なかったので
はやくもやる気が
なくなるなな。

(これがやる気なし占いの効果なのかは分からないが…)

「そうだなあ」
育成ゲームなんて
どうかな？」

次は怜治が答える。
「いいねえ。犬とか
育てるやつでしょ？
私そういうの好き」
で、なにを育てるの？」

「ミジンコ」
「地味っ!!！てか、
数あるなかで何で
ミジンコ？他にある
でしょ!!！」

「他にもあるよ」

「え？ホントに？」

「そっちはまともでしょ？」

「ミカツキモ」

「やっぱりやめる…」

「いよいよ、」

やる気が0に近づくと

ななは最後に

「魔王がやりたいな」

「やるか」

「うん…ところで」

魔王ってどんなゲーム？」

怜治が答える。

「魔王とは、一度は」

世界を手中に治めるも

実家の農家を継いだ

魔王の話だ」

「…なんかしょくもない

感じがするんだけど…」

「基本はRPGだが」

魔王の畑を襲ってくる

モンスターを力でなく

作戦や罠で倒すという

タクティクスな

ゲームだ」

「なんか妙に
凝ってるね…」

「ちなみにモンスターは
捕まえて手懐けると
畑の手伝いをします」

「可愛いな…」

「モンスターを
倒してもお金は
貰えません。あしからず」

「ただのやられ損!？」

「さあ、そんな君も
魔王になつて
田舎でのセカンドライフを
エンジョイしよう!!」

「魔王、関係なっ!!
もういいよ…
やんない…」

(私には1日ですら
保たなかった…)

伝説は嘘だと思った
ななであつた。

第17話 ヘルトでビルド

「うまいっ!!」

「おいしいねっ!!」

「うつつ!!」

怜治がいきなり

テーブルに倒れ込む。

「ど、どうした怜治!？」

「大丈夫!？」

「うつつ……」

怜治がまだ唸っている。

「やべー、バリトウボールに

あたったか!？」

「もしかしてゲロ味!？」

保健室に!？」

ななと慎治は慌てて

怜治を起こす。

「うつつ、うまい!!」

「……」

怜治がケロツとした

顔で言うと二人は

眉間にシワをよせ、

イラついた顔をした。

「おい……ここ笑うと……」

小さい声で遠慮がちに

言う怜治……

「……」

「ところで慎治……」

「なんだ？ なな」 慎治のお腹をジロジロ、それから視線を移し、顔をジロジロと見る。

「太った…よね？」

「そうかあ？」

首を傾げる慎治。

「最近体重測った？」

「いいや。半年前の身体測定以来測ってないと思う」

「そのとき何キロ？」

「うん…60かな」

「怜治、出して」

「ほいさ」

怜治がなにやら

部室のロッカーを

ゴソゴソしだした。

するとビクツと一瞬

してから

「あつた」

ロッカーから重い

四角いものを持ってきて

ななの目の前に置く。

「ささ、測ろう」

「いや、いいけど

なんで体重計あるの？」

ななと怜治が顔を

見合わせて

「「ね〜」」

とにこやかにスルーする

「何だよ。何があったん？」

「「ヒ・ミ・ツ」」

ため息をつく慎治。

「まあいいよ」

テーブルにあった

体重計を床に置いた。

すると、電気ではない

ので、カランカランと

旧式らしい音があった。

すると、ななが

慎治に

「西園寺？」

「バツイチのOL!？」

てか、ボケがマニアック

過ぎて、多分読者

分かんないよっ!!!？」

怜治が何故か、誰も

いない方を向いて

喋りだした。

「今の会話が分からない

読者の方は第5話を

読んでね」

「そついう告知はいい!」

慎治が体重計にのると

またもやカランカランと

測りが動く音がした。

「70…70!!!？」

「太ったねえ」

「ヤバいなこれっ!!」

運動してねえからだな」慎治が体重計から降りる。ななが

「西園寺？」

「もういいわっ!!」

「ヤバいな」

痩せないとかあ」

でも、どうやって？」

怜治がだみ声を出し、

「テツテレテツテテ」

そんな慎治君には…」

「ドラ もん!？」

またロッカーを

ガサコソする怜治。

「スタンバイしとけよ!!」

「電気ベルトお」

「…」

「どうした？」

「いや…何それ?」

コホンと咳をひとつ

ついた怜治は

「きよーはこのっ!!」

エクサザイスベルト!!」を

ごしょーかいます!!」

「たか 社長!？」

「見て下さい!!」

このボデエー」

「普通に喋れ!!」

「なんなんそれ？」

「ななが聞くと」

「これはですね!!」

「電気力で脂肪を」

「揺らして腹筋を」

「らくらく」に

「鍛えてくれる」

「ちよお〜優れもの!!」

「じゃあ、ななやれば」

「でも、お値段が」

「高いんでしょう？」

「通販の主婦かつ!!」

「だいじょぶ!!」

「なんとお値段は」

「5000円きりまして」

「4999円」

「一円だけじゃん!!」

「まあ安い!!」

「マジかよ!!」

「呆れてきた慎治。」

「しかも分割手数料は」

「全てジャパネットが」

「負担しますっ!!」

「やっぱりたか かよ」

「しかもクリスマスセールと」

「ボーナス利用分割で」

「更にお安くなります!!」

「キャ お得!!」

「はあ〜…」

(なんか疲れた)

いつものツツコミ役が
ボケ倒すので先に
不安を感じる
慎治だった。

「実はこれは

二階堂君からの
貰いものだ」

普通の喋り方で

説明する怜治。

「そういえば、二階堂君
太ったよね〜」

「本人曰わく、

>寺島さんにフラれたく
のが原因らしい」

「まあ、無理ねえ〜な

二階堂君だもんなあ」
「
ななが不思議そうな
顔で質問する。

「でも二階堂君、

まだ太ってるよね？

これ効果ないんじゃない？」

「いや…」

ここで怜治が
反論する。

「実際、彼の腹筋は

割れていたが…」

「いたが？」

「失恋を引きずり、

リバウンドしたらしい」

「そ、そうなんだ…」

(そうとう好きなんだ)

見事に思考がシンクロ。

「というわけで

いらなから貰った」

テーブルの上に

黒く太いベルトが

置いてある。

慎治がそれを手に取る

「やってみるか」

腹部に巻いた慎治。

「おっさんみたいだなWW」

「似合ってる似合ってるWW」

「お前ら、WWって

なんだよ。てか、どこに

スイッチがあるんだよ」

「スイッチなら

中央のところ、

何か余計に膨らんでいる

ところにあるぞ」

怜治が答えると

慎治がキョロキョロと

探し出す。

「これか！」

スイッチを押す。

「ちなみに…」

「うっ、うおー！」

慎治の腹部が

ぶるんぶるんしだした

しかも腹部だけでなく

顔や腕、足といった

体中がぶるんぶるん

しだした。

慎治はあまりの振動に

耐えられなくなり

倒れた。

「大丈夫！？慎治っ！！？」

「だ、だだ、だづづ、

げげづつてて、て」

「>最強<にすると

立てなくなるから

気をつけろと

注意書きに書いてある」

「ぞぞぞ、ぞきぎぎに

いいいえよよＹ〇！！」

「ラップ！？余裕綽々？」

>最強<から>弱<に

レベルを変えたので

ちゃんと立って話す。

「なんかこれだけじゃ

微妙だな。他に

なんかないのか？」

怜治に聞くと

またロツカーを
ゴソゴソとやる。

「二階堂君から
そいつに付属してきた
エクサザイスのビデオが
あるが…観てみる？」

「観てみるか…」

これからはビデオに
変化します。

ツッコミなしで

お楽しみ下さい。

みんなも三人が

なんてツッコむか

想像しながら観よう！！

じゃなかった

読もう！！

> やあ、こんにちは！！

日本の皆さん

私は隊長のマイケル！！

毎日エクサザイスを座椅子で

みんなに教えている！！<

一人のムキムキの男が

意気揚々と話す。

> みんなが今している

ベルト！なんて名前か

知っているかい！？<

耳を傾けるマツチヨ男。

> そうだね！ スーパー スター 腹筋キンベルトだ！！<
ベルトを指差す。

> たか 社長の説明の

通り、このベルトは

腹筋をらくうゝに

鍛えてくれる！！

見てくれ！！

このボデエー！！！！<

ムキムキはベルトと

自分の体を指差し、

どや顔をしている。

> さあ、まずはダイエットに

成功した人の感想を

聞いてやる気をだそう！

VTR！！カモンっ！！！！<

「まてまてまてまて！！！」

「どうした慎治？」

「なんで無法地帯にした？

おい、作者！！

ここはボケの

治外法権かつ！！

さっきのだけで

ざっと10ヶ所以上

ツッコミどころあるぞ！

この話、やりたい放題か！！！」

作「まあまあまあ」

「」「」でてくるなよ！！！」

世界観滅茶苦茶だろ！」「」

「…たくつ、続き！」

ビデオは再び再生。

今度はツツコミありで…

モザイクの太い声でモザイクかった太い男性が話す。

>このスーパースター腹筋キンベルトに出会って人生が変わりました
たく

「名前ださっ！！」

なんでモザイク！？

てか、男性

太ってるじゃん？」

テロップに

「どうして太ってるんですか？」と出る。

「聞いちゃった！？」

>いやあ〜失恋を

引きずっちゃって

リバウンドして

しまったんですよ

「」「」「二階堂君！……」

テロップがまた出る。

じゃああなたは

色々な意味で

成功者ではないのでは？

「厳しいな！！製作者」

ビデオの二階堂君？が
明るく話す。

>まあ、その観点から
言えばそうですね。

が私は誇り高き

失敗の成功者だと

言えるのでは

ないのでしょうか？

僕はこうして

失敗の成功者として

失敗することを

恐れすぎている現代の

若者達に失敗を

恐れない心の強さを

伝えていきます！！

なので違う観点から

見れば、僕は

成功者そのものだと

思います！！<

再びテロップ

では、現代の若者達に
一言…

> 失敗を恐れるな!!

進め!! 熱く生きろ!!

夢は寝てみるものじゃない!!

起きてみるものだ!!

BY 松岡修造WWW<

「「「おいつ!!!!!!」」」

第18話 おでんレポリユーションズ

「あの…」

「なんだい？」

「なんですか…」

「このセットは？」

ななが周りを見る。

クイズ番組のような

席が3つ、

それぞれ等間隔にある。

番組ならお客さんから

見て左から慎治、怜治、

ななの順に座っている。

机にはフリップボードと

マジックが置いてある。

司会者の席には

以前三人が強盗を

捕まえた店の店長が

座っている。

ななの質問に

店長が答える。

「君達には依頼書を

送ったハズだが…」

そう、ななは店長の
依頼でここに来た。

がしかし、

「依頼内容は分かります」

「じゃあなんで？」

「このセットの

必要性が分かりません」

「君達により良い

革命を考えて欲しい

ためにわざわざ、

作っただよ」

（お金の使い方を

間違っている…）」

ななは困惑した。

「そう、革命だっ！！

おでんのおでんよる

おでんのためのおでん！！

つまり、革命だ！！

君達にはその義務と

知恵がある！！

頑張つてほしい！！！！

だから、私の私財を

投じてこのセットを

作っただ」

WJCの今回の依頼…

おでんの新メニューを

考えよう！！！！…DEATH

「「「はあ…」」」

やる気のない返事。

が、店長は気にしてはいないようだ。

ドンドン熱が上がる。

「私がおでん仙人に
教わり、早40年……」

（おでん仙人つて何もん！？）

「仙人の母国である

インドでの修行の日々が

思い出される……」

（おでん仙人つて

インド人！？インドに

おでんあるのかっ！？）

慎治も声に出さず

ツッコむ。

「私は今だと思つ。

おでんであるようで

おでんでない……」

（じゃあ、おでんじゃないね）

怜治も慎治に続く。

「おでんの革命児を

作るべき時だと……！！

おでんマスターを

目指す若き三人よ……！！

「今こそ革命の時だ!!!」

「（（ただのおっさんが
おでんについて
泣いて語るって
どうなの?）（）

店長の頬には
一筋の光の道が…

「では、始めよう!!
新メニューを
革命の風雲児を
ン~~~~
シンキングっ」

「店長、そんなキャラなの!?!」
というわけで
三人は新しい
おでんのメニューを
考え始めた。

慎治、怜治は
さらさら書けているが
ななはずっと
頭を抱えている。
「うっん、こつこの
苦手なんだよなあ」
マジックがあまり

すすまないななに
店長は

「どおしくしたのあ？
フアイト」

「店長キモっ!!」
思わず罵声が出る。

10分後…

「では、マジックを

O N T H E t a b l e
」

三人はマジックを
t a b l e に置いた。

「うう…良いもの
思い浮かばなかった」
ななは疲弊しきった
顔をしている。

「では、慎治君の
フリップをopen!!」

「カンパン in T H E ハンペン」

「語感だけだろっ!!」
「いや…」

ななの批判に

怜治が静かに言う。

「良いダジャレだろ」

「それってやつぱり

語感だよね!？」

「採用」

「簡単だなっ!! 店長!!」

「いや、響きが良い」

「やつぱは語感!？」

「語感より味でしょ!!」

「じゃあ、次に怜治君」

「こんにやく ON
こんにやくゼリー」

「それってこんにやく
オンリーじゃん」

「お年寄りには注意」

「否定なしなのね!？」

「まあまあ…採用」

「また?それで良いの!？」

「では、なな君の」

「ちくわ with チーズ」

「すでにあるんじゃない？」

怜治が言う。

「ええ!?!」

「コンビニとかで

あると思うよ。

ねえ、店長？」

「うむ。店にある」

「うう、ゴメンナサイ」

「が……」

店長が続ける。

「チーズを北海道の

最高級のにするので

採用」

（ ）（ ）もしかして

全部採用する気じゃ（ ）（ ）

「じゃあ、二周目!!」

慎治がフリップに

チョコチョコと

何かを書く。

「昆布 ON the ライス」

「別の料理じゃん!？」

「いや…」

また怜治が反論する。

「おでんではない、

という点では革命では

ないだろうか？」

「じゃあ、だめじゃん」

「採用」

「では、怜治君」

「コング with 鈍器」

「怖い怖い怖い!!」

しかも食べ物じゃないし

もう論外!!」

「語感を大切にして

考えました」

「味を大切にしろおお!!」

「次になな君」

「大根＋だし汁」

「」「」「まんまじゃん！……！」「」「
「うっ……」

「いやゝありがとう！
多分、革命が起きるよ」

あのあともう一周
考えた。

慎治「鶏肉＋秘伝のたれ」
（間違いなく焼き鳥）と
思ったなな。

怜治「おでんプール」
店長が私財を投じて
作るらしい……。

なな「だし汁＋ライス」

みんなから「おやじか」
って言われたななは
少し凹んだ。

結局、店長は

すべてを採用した。

「店、大丈夫かな？」

帰り道。二人に聞くと

「無理だな」

即答。

1ヶ月後…

店の入り口には

「おでん売り場のことで店員達が蜂起と暴動を起こし、店長が変わったため、少しの間休業します」

という張り紙。

「革命は起きたな…」

「うん」

慎治の言葉に

二人も頷いた。

おでん革命は成った！！！！

第19話 ギリギリ日本史(前書き)

久しぶりにあの三人が帰ってきました しょくもない学園コメディ
の始まり始まり〜!!

第19話 ギリギリ日本史

活動報告〜!!

今日は慎哉を含めて

4人で部室に

集合しました。

なにやら慎哉から

お願いがあるみたいで…

「すみません、

アニキ達に折り入って

お願いがあります」

真剣な面もちで

じつと慎治と怜治を

見つめる。

「まあまあ、そんなに

かたくなるなよ。

俺達の仲なんだから

もっと気軽になっ」

慎治が軽くいう。

「で、どうしたんだ？」

「うす

慎哉が事情を

説明しだした。

「アニキ達も知つての

通り、学校は期末テスト

ですよね」

「ああ、そうだな」

「俺、全然勉強とか
わかんなくて…」

努力はしてるんですが
どうしても出来ない

教科があるんです」

「それを俺達に

教えてもらいたいと」

怜治が補足すると

慎哉は頷いた。

「もし、赤点でも採れば

留年してお袋に

迷惑かけることに…」

お袋は女手一つで

俺を育ててくれて、

だからどうしても

赤点採るわけには

いかないんです」

「わ、わ、わがっだ」

慎哉の話を聞いて

慎治、怜治が

泣いている。

「俺達がなんどが

じてやるがらな…！

なあ、なあ…！」

怜治が私に同意を

求めてきた。

私はギクリとした。

「う、うん…！」

そ、そうだね…！」

私の声は裏返し、

妙に明るい声になった。

二人がそのことに
気づかないわけがなく、

「どうした？ なな」

「なんか変なもんでも

食べて腹でも痛いんか？」

と心配そうな顔で

私に聞いてきた。

「な、なんでもないよ！

ただ……」

「「ただ？」」

「私は慎哉くんの

力にはなれないかな」

って思ってた……」

「「どうして？」」

「「どうしてって……」

仕方がない。

正直に話すしかない。

「私、私……日本史の

テストで50点以上を

採ったこと……なく……て」

最後の方はかなり

小さな声になった。

すると怜治が

「なら、二人とも

俺達に教われれば

よくない？」

「うん、そうだ」

慎治も同意した。

「いいの？」

「慎哉、いいか？」

慎治が慎哉に聞いた。

「勿論です。」

一人よりアネさんと

一緒に勉強したほうが

楽しいです。

お願いします」

「やったあ〜!!!」

久々に柄にもなく

はしゃいでしまった。

「じゃあ、日本史強化特訓

スタートだ!!!」

慎治が気合いを

入れる。

「「「おお!!!」」」

「では、始めるぞ。」

先生の質問に答えるよ。

先生は怜治がやる」

「慎治はやんないの？」

「俺は教えるほどの

点数は採ってない。

せいぜい70点ぐらい。

それと…」

声を小さくして

「怜治からは口止めを

されているから

大きな声では言えないが

怜治はどうやら

歴男らしい…しかも

一つの時代ではなく

日本史全般…

俺は怜治が教科書より

知識を持つてると

確信している」

「マジでっ!？」

「なにコソコソ

話してんだ？

始めるぞ」

怜治がやる気まそまそな

感じで私達に注意した。

「慎哉、範囲は

どこからどこまでだ？」

怜治が慎哉に聞いた。

「言いにくいんですけど

全部です」

「全部!!全部って、

どの全部!？」

「いや、日本史の

全部です」

私はクラクラして

しまった。ただの

期末テストなのに

日本史全体が範囲なんて…

「なるほど。ならば

逆に楽だな」

怜治が自信たつぷりに言った。慎治が問う。

「どうしてだ？」

「全体が範囲と

いっても普通の

テストと問題数は

同じにしなければ

先生が大変になる。

丸付けとかがね。

だから、歴史の

要所要所しか

出せなくなるんだ」

慎哉が不思議そうな

顔をして

「つまりどういうこと

ですか？」

「つまり歴史の

重要なことしか

テストに出せない。

だから、そういうところを

狙って問題をだしていく。分かったら、俺に言うこと。始めよう。

第一問……」

「近代化が進む日本の家庭では電化製品が普及しました。そのとき家庭で絶対になければならないもの3つを神様の道具に例えました。

3つをまとめて何という。またその3つの製品を答えよ」

うう…わからない。

どうやらそれは

慎哉くんも同じように
うなっている。

「ヒントは(じ)、で
始まる言葉」

それを聞くと慎哉は
分かったというように
手を叩いた。

「三種のじんぎ」

「正解！！じゃあ製品は？」

「アニキ、ドス、杯」

「ちょ、ちょちょ！！」

ちょいまで、慎哉。

何て言った？」

「アニキと

ドスと杯っス」

「それって三種の

仁義だよね！！違うよ。

てか、電化製品って

言ってるのになんで

アニキとドスと杯が

出てくるんだよ！！」

「いや、それほどでも」

「誉めてないけども！？」

私は答えが分かった。

「車、白黒テレビ、

エアコンだ！！」

「違う！！それは3C…

でもないっ！！！！

白黒テレビじゃ

Cじゃないじゃん！！」

珍しく怜治が

ツッコミ疲れている。

「なあ…二人共、

ふざけてないか？」

私と慎哉くんは

首を思いつきり

横に振った。

「真面目、

真面目なんだね！

すっごい天然だな

二人共」

「正解は三種の神器で

洗濯機、冷蔵庫、

白黒テレビね。

ちなみに3Cは

車、カラーテレビ、

エアコンね。じゃあ次」

「鎌倉時代、鎌倉幕府は

仕えていた武士達に
御恩として土地を
与えていました。
武士達はかわりに
戦いがあると（いざ、
鎌倉）といつて
駆けつけて戦いました。
この関係のことを
御恩と…？」
慎哉くんは手を挙げた。
「はい、慎哉」

「上下左右つす」
「それは方向！！」
「おしい！…か！？」
「分かった！！」
私は続いて手を挙げた。

「東西南北だ」
「違うよ！！それは方角！
どちらかというと
正解から遠ざかった！
正解は御恩と奉公ね」
「慎哉がおかしな顔をして

「あつてるじや
ないすか？」

「漢字が違うし
そもそも答えかたが
違つてたでしょ！！次」

「古代、海外からの
侵略に備えて
九州沿岸で防衛に
あたっていた人達を
なんというでしょう？」

今度こそ分かった
私は思わず
大きな声で言った。

「やきもきだ！！」
「待ち合わせ中デス力！！」
「違うの？」
「さつきから
なんとなくは
あつてますけど
根本的には全然
違いますよ！！正解は

防人ね。次」

「冷戦のときの
アメリカ側の組織の
名前は？」
二人で揃って

「納豆！！！！」
「食べ物！！」
組織だって組織！！次」

「中大兄皇子と中臣鎌足が蘇我入鹿を暗殺した事件のことは大化の
？」
「かえしん！！」
「シャープペンか！！」

「元の初代リーダーは？」

私達は何も

思いつかなかったから
黙っていたら、

「うーん、分かんないか
正解はチンギス・ハン」

「ジンギスカン？」

ふざけないでよ、怜治。

歴史なのになんで

料理名？」

「チンギス・ハン！

チンギス・ハンだよ」

「ああ、チンギス・ハン」

「次、その子孫で

日本に攻めたのは？」

これも私達は

答えなかった。

「フビライ・ハン」

「エビフライ犯？

捕まったんすか？」

「逆にこっちが

聞きたいよ…」

「キリスト教を

布教した人は？」

私が答えた。

「イエス・キリスト？」

「そうだけでも

意味が広すぎ!!!」

「イグナティウス・ロヨラだ!」

「日本史日本史!!!」

慎哉わかる?」

慎哉くんはボソツと

「ガスパル・ヴィエラと

ルイス・フロイス?」

「ちが…って

あつてるけど、

もっと代表的な人。

あの頭が特徴的な人」「侍!!!」

「ななは黙つときんさい!!!」

怒られた…

頑張ってるのに。

こうして2時間

日本史の特訓をしたが

とうとう怜治の体力も

限界に近づき、

「つ、つぎが最後の

問題にしよう」

ハアハア言っている。

ヨロヨロと

立っているのも

やっこのようだ。

「最後の問題。
弥生時代に作られた
特徴的な器は
何て名前？」

慎哉くんが今までにない
自信まそまそな顔をして
私を見てきた。

「ちよつと耳を
拝借」

ゴニョゴニョと
私に囁いた。

そして立ち上がった。
向かいのソファーに
座り、なにかを布で
磨くような仕草を
しだした。

私は慎哉くんの
言うとおりにした。

慎哉くんがいう。

「やよいさん、

もう閉店時間ですよ」

私は台詞を言った。

「いいじゃない。

もう少し飲ませてよ。

これからが私の時間よ」
言い終わると

私達は怜治をじっと
見つめた。

怜治は苦しそうに

一言ずつ噛み締めながら

「つまり、やよい（時）？」

私達が頷くと

慎治は倒れた…

数日後、慎哉くんが
部屋にきた。

「アニキ達のおかげで
なんと…」

日本史のテスト用紙を
私達に見せた。

なんと89点!!

「すごい!! 良かったね」

「有難う御座います」

「いやいや、お前の
努力だろ」

慎治が慎哉くんを誉めた

「ところで…」

慎治が私を意味ありげな
視線で私を見た。

「ななはどうだった？」

私はテスト用紙を見せた

「うおっ！！95点」

「マジっすか！！」

「えっへん！！」

私は人生の中での

日本史の最高点を

採ってしまった。

「これなら怜治に

勝っちゃったかもね

怜治は…」

私は言葉を失って

しまった。なぜなら

部室の片隅で

壁と見つめ合い、

膝を抱えて

ブツブツと言っている

怜治がいた。

「あのなあ…なあ」

慎治がひそひそと

「あいつ、日本史0点で

しかも解答が全部

お前達みたいな感じ…

納豆って書いたり

やよい時って書いたり」

ごめん…怜治…

私はこのときほど
怜治を哀れに思ったことはない。

第20話 当たる確率

活動報告の時間で〜す

今日は学校の

自動販売機前に

三人で集合しました。

ここには全部で四台の

自動販売機があります。

わざわざ自販機に集合…

二人は何を企んで

いるんですかね？

ニヤニヤしています。

慎治がおもむろに

一歩踏み出して一台の

自販機に近づきました。

「今日の活動は

他ならない…

ある投稿があつた」

なんかム力つく笑顔で

言うので殴りたい気持ち

を抑えつつ私は

「どんな依頼？」

とサバサバと聞きました

鯖鯖と…

「詳しくはWEB…

じゃなかった。怜治」

(中途半端にボケるな)

と私は心の中で言いました。

「了解。説明する。」

匿名希望のPN .

「どじょうするなら票をくれ
沢」さんからの依頼だ」

支持率あげばよ@倶楽部ダチヨウ小

「何で匿名希望なのに

PN長いの…」

私は聞いてて呆れた。

怜治は説明を続けた。

「うちの学校の自販機は
当たり機能がついている
が、何でも「どじょう」…

以下省略」さんは

毎日買っているが

いつまでも当たらない

らしいので本当に

当たるのか調べて

欲しいそうだ」

「またまたしょくもない
依頼だなあ」

当たらなくても

いいじゃん」

この学校には

もの好きな人が

たくさんいる…

（詳しくは他の話を

お読み下さい。WEBは

ないのであしからず）

まあ、二人より変人は

見たことないけど。

私は遠くを見る目で

二人を見つめた。

早くも私にはわからない

興奮に包まれて

いるようだった。

「あ、でもさ…」

慎治と怜治がこちらを

不思議そうに見た。

「どうしたかな？」

私はあることに

気づいた。そういえば

私たちの部活って…

「自販機で買うのに

お金必要じゃん？

部費なのに

どうやって買うの？

まさか自腹ってことは

ないよね？」

「フッフッフッ」

慎治が意味ありげに

笑う。

「心配は無用だ」

そう言うとポケットから

茶封筒を出した。

「我々の活動が広く

学校に知れ渡り

校長から直々に部費を

いただいたのだ。

その額なんと一万円を

きつて9800円……！」

「通販かつ……！てか、

そこは一万円で

いいでしょ校長……！」

「そういえばそうね」

「軽いな……慎治」

私のツツコミを

軽く受け流す慎治。

部費にはあまり

こだわって……

「あつ……！！でも……！！」

慎治が何かに

気づいたように

大声をだした。

「自販機はひとつ百円

だから98個しか買えない

一万円なら100個

買えたのに……」

「その発想小学生……！」

微妙なこだわりを

見せる慎治だった。

「では早速、

活動に移るが

この自販機のみで

当たりを目指す」

慎治が一番端の

自販機を指差す。

一番古ぼけたものだ。

「なんであれだけなの？」

私が聞くと怜治が答えた

「ひとつの自販機で

買ったほうが当たりが

出やすいだろう」

「なるほど」

私は納得した。

変なところには

頭がいいな。

「それと実験の許可が

あれしか出なかった」

「なんで？別に買うのは

自由何だし……」

「言い方を間違えた……

あれでやれと学校からの

命令だ」

「なんでまたあれなの？」

「ななは知らないのか？」

自販機で買ったことは？」

「私はいつも水筒。

買ったことないけど

どうして？」

「あの自販機は

この横須賀総合学園

高校の名物、「何でも自販機」だ」

「なにそれ？」

私は初めて

そんなことを聞いた。

そんなものがあつたなんて…

「名前の通り何でも
買える夢のような
自販機なんだが…」
「なんだが…？」

「出てくるものが
ランダムなので
たいていいらぬものが
出てくる（笑）」

「しよゝもなっ…！」
「しかも設置したのは
何を隠そう校長だ
校長の個人的趣味で
置いているらしいW」
「なんなのこの学校！？
校長かるっ…！」

「さらに補足説明をするとこの自販機は春によく売れるらしい」
「なんで？」
「新生が珍しがって
毎日買うらしい」
「そうなんだ」
「が、その他の売上は
ほぼ0に等しい」

まあ、そうでしょうね。
いらぬものを買つても
そくゴミ箱だろっね。

そんなこんなで

私たちは当たりを

目指して自販機で

ものを買いはじめた。

「まずは俺が…」

慎治が自販機に向かう。

『おおきに』

あんちゃんいつぱい

買ってやあ』

「へ、この自販機

話すんだ」

私が感心していると

「うむ。最近はこの

タイプが結構あるな」

「なんで関西弁？」

「さあ？ただ単に

開発者が「関西弁、

めっちゃええやん！！

温かみ感じるやん！！」

とか言ってる

関西弁大好き関東人

だったんだろ」

「まあ、確かに

関東人って関西弁を

やたら使いたがるもんね」

（開発者の方、

申し訳ないです汗）

作者より

「もういい？」
私たちの会話が
終わるのを慎治が
待っていた。
「どぞどぞどぞ」

白い見本も何もない
ただ黒いボタンが
数ヶ所あるだけの
自販機に百円を入れる。
慎治が一番に目に入った
ボタンを押す。
ボタン！！
ガタン！！

『ルーレットスタート』
普段金額が表示される
ところで数字が
ちかちかとまばたく。

『77…』
「よっしゃ！！」

リーチ…
『778』
「うわ〜」

慎治が言い終わらない
うちに無残にも8が
ハズレを示す。

「惜しかったね〜」
「大抵はこんなもんだ。
リーチで期待させといて
だいたいハズレ。
おおかた、開発者の

ドSな性格を示す
ものでしかない」

(開発者の方申し訳ない)
作者より

「当たり前より私は
何が出てくるか
気になる」

慎治が出てきたものを
取り出す…

「ゴーラ？」

「珍しく普通に

ジュースが出たなW」

慎治が赤い缶を

取り出した。

私はちよつと安心した。

二人の話から

もつと危ないものが

出てくるかと思つてた。

「じゃあ次私が」

慎治からお金を受け取り

自販機にすべりこませる

『ねえちゃん

かわええなあゝ

いくつなん？』

「おっさんか!!!!」

自販機にツッコんだのは
初めてだった。
ガコン。

「なんだろう」

ガチャガチャとかで

感じるあのワクワクした

感覚が私を包んだ。

受け取り口に手を入れる

「うん？」

何やら白い箱が…

「なんだろう？」

そこにたまたま

顧問の谷山先生が

通りかかる。

「お」

「先生」

慎治と怜治が

挨拶する。

「なにこれ…」

私は箱に気を

取られていた。

なぜなら力チ力チと

中から音がする。

「時計かな？」

「お、狭山も…!!」

お、お前それ…」

「あ、先生。

これ知ってるんですか？

何なんです、これ？」

谷山先生は顔が

真っ青になっていた。

「爆弾だよ……」

「へ？」

「実験でたまたま

出来ちゃった爆弾。

いいから早く寄越せ」

「そんな馬鹿な」

先生の冗談はいつも

聞いてますよ」

「はやく、こつちへ……！」

「しよゝがないな。

いきますよ」

それ……！」

「ば、なげるなっ……」

ドカーン……！！

谷山先生は黒こげ。

『じょうちゃん

ハズレや』。

またこつてやあ」

次はサービスするわあ』

陽気な声がこだました。

「次は俺が行こう」

意気消沈気味な私を

差し置いてウキウキ声で
怜治がいった。

『あんちゃんか〜
じょうちゃんがええなあ』

「エロおやし販売機だな」
軽く流して怜治が
ボタンを押す。
ガコン。
何やら茶色ものが…

『残念！タワシやな！
またいらっしやあ〜！い！い！』
「新婚さんかつ！…！」

「なかなか手強いぞ。
この自販機…」
「あまりツッコまずに
スピーディーに行こう」
「了解」

慎治が二巡目。
テキトーボタンを押す。
ガコン。

消しゴム(20個入り)

私は心の中で叫んだ。

(いらねえ〜!!!!!!!!!!)と。

私の二巡目。

ガコン。

お茶らしきもの。

ホツとしながら

取り出すと…

「熱い!!!!!!!!」

夏なのに

ホットがでるよ

あったかい

川柳を詠んでしまった…

怜治の二巡目。

何やら生物が…

ギョーザ!?

五角形のギョーザが!

しかもなんと文字が

かいてある。

「ギョーザの 将!?!」

絶対に焼いたら

中が生になるだろう。形的に。

慎治、三巡目。

「そういえば、

2つのボタンを同時に
押すと当たりが

出やすいって聞いたぞ」

何やら自信ありげに

慎治が言い出した。

「俺もある」

怜治も続く。

「え〜。聞いたことない」

私が言っていると慎治が

「男専用なんだよ」

といった。

「俺で当てるぜ、

よしっ！！！！」

2つを押す…

「ダメでした」

でしようね。

結局ハズレると

思ってたよ〜。

「いや、慎治。

お前の押すタイミングが
少しばかりズレていた」

(どんだけ同時押しを
推してんの、この2人
過信し過ぎでしょ)

「そうかつ!!」

(納得しちゃうのかい!)

「次頼んだ怜治」

「いや、俺はやらない」

(やらないんかい!!?)

「俺はおつりレバーを

下げながら押すと

当たると聞いた」

(前言撤回?)

2つボタン聞いたって

言ったよね!)

「なな、次は俺が行く。
いいか?」

「ど〜ぞど〜ぞ」

ぶっちやけ私は

アホらしくなったので

心のツッコミに

専念します。

怜治が百円を入れる。

ゆっくり深呼吸したあと

一瞬でボタンを押し、

おつりレバーを同時に

下げた。

カラン。

百円玉がおつりで…

（そりゃあ、

そうだろうね）

怜治が再び挑戦。

カラン。おつり。

怜治がただのイタい子
としか見えなくなった。
もう一度やろうとする

怜治の肩を慎治が叩く。

怜治が振り返る。

慎治が首を横にふる。

「もう…いいんだ怜治」

「し…慎治！！！」

2人が抱き合った。

（何この茶番…）

そのあと慎治怜治の

2人が交互に買ったが

依然として当たらない。

お金も徐々に減り、

98回目となった。

『あんちゃんは

もう勘弁やあゝ

若いピチピチの
じょうちゃんを
連れてこんか」

「くそ！自販機のくせに」

慎治が自販機を

睨みつけた。

「しかし慎治。

あと百円しかない。

次で当てなければ…」

「そうだな。

だけど、もう俺達が

やっても出ないだろう。

ここは自販機の

言うとおりにななに

買ってもらおう」

「めんどいなあ」

「「ネエサン頼みます」」

2人が無理やり私に

百円を押し付けた。

「お、じょうちゃんや。

サービスするでえ」

「ハイハイそうですか」

ガコン。

普通のペットボトルの

「午前の濃い茶」が

出てきた。

「ルーレットスタート」

『 77... 』

『 777!! 』

当たりやあゝ

おめでとさん!! 』

慎治怜治が喜びで

爆発した。

「「おおおお!!...!!...!!」」

ガコン。

何かが出てきた...

『 大阪名物タワシヤ!!...!! 』

「「「いらっしやうい……!……!」」」

それじゃあ、師匠も

椅子から転げ落ちるね

私は二度とあの自販機を
使わないと心に決めた…

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n3700n/>

しょ～もなっ!!

2011年10月7日19時07分発行